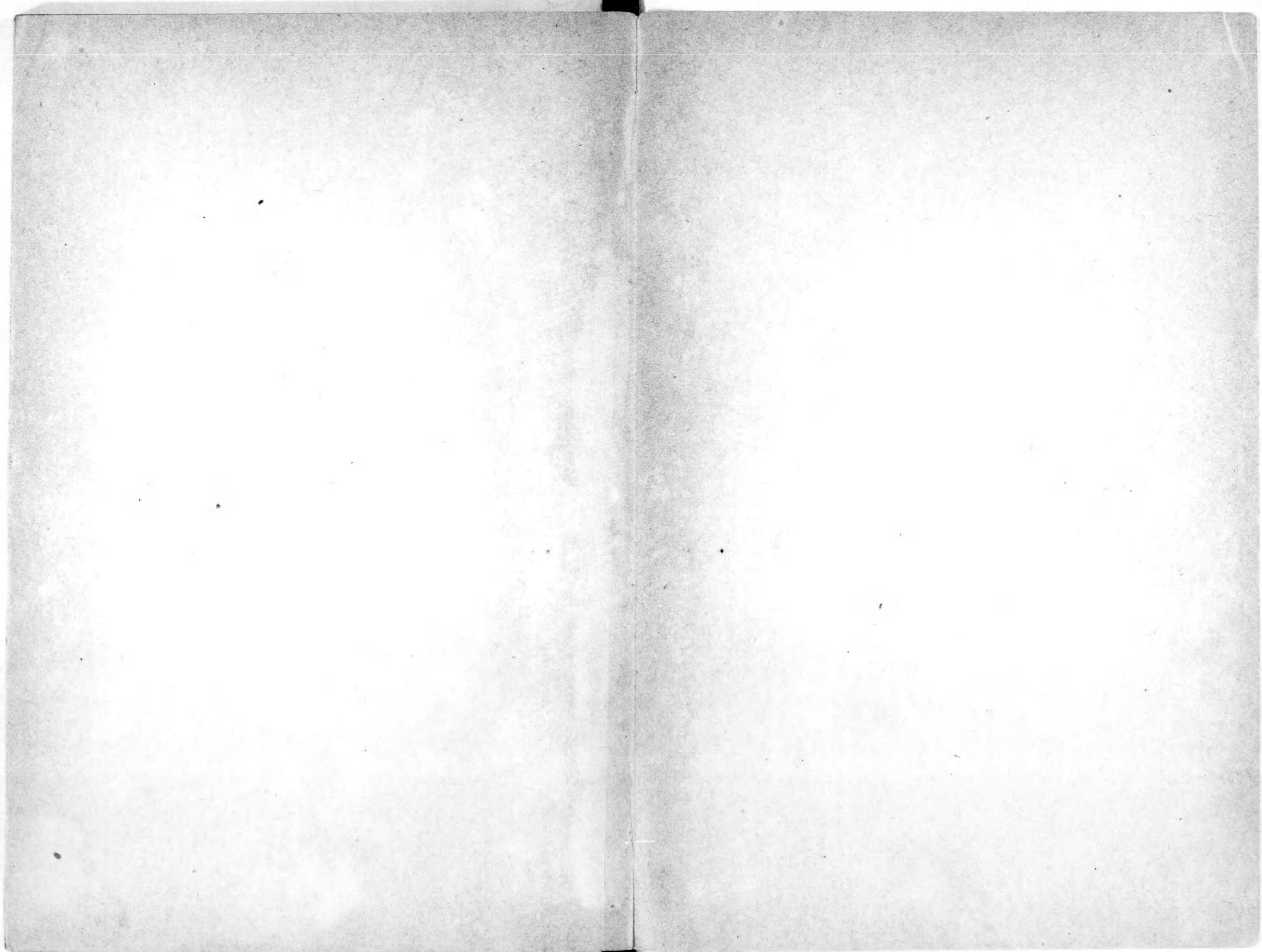


武田櫻桃著
竹久夢二画
小説
酌
日記

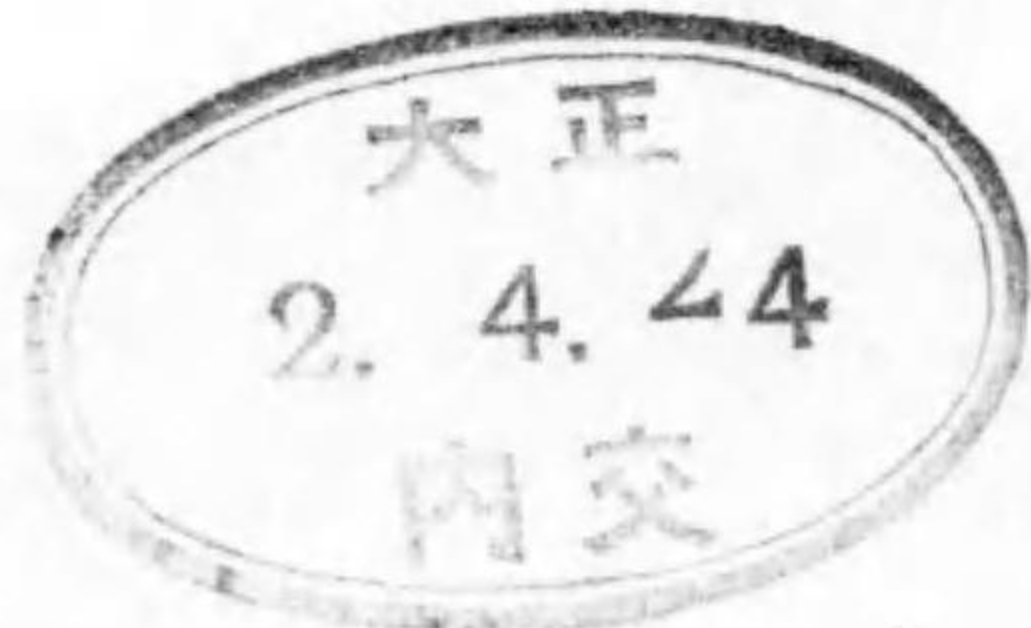
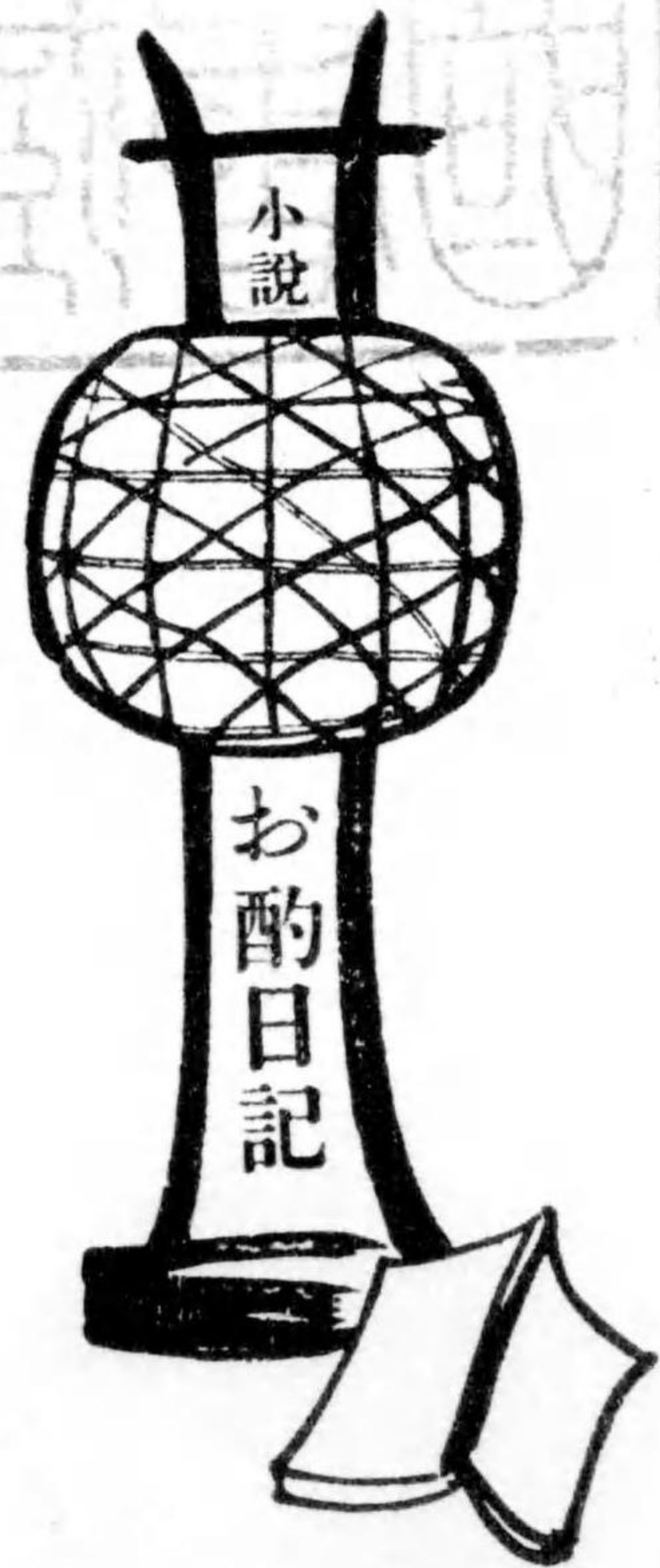


始





特106
516



はじがき

讀んでハ、ご笑ひ給ふごも、乃至はホ、
、ご笑み給ふごもそは皆様の御隨意なり、
御勝手なり。只此書をたんに買ひ給ふて書
肆をエへ、ご笑はせ給へ、さすれば著者
もウフ、なり。

寢て食ふて送る丑の二月

著者誌す



を主り1月?の五十も年

るなとみやわてめそひ思

露光量違いの為重複撮影



多
子



昭和二十一年五月十五日
多子
多子

目次

お酌日記	一頁
喜劇 駢落	二七頁
滑稽小品	一七六頁
彌次郎日記	一七六頁
無法者の三時間	一八三頁
田園三日生活	一九七頁
糸蒭蒭	二〇九頁
物干竿	二三頁

半响侯爵……………	三三頁
門禮者……………	三七頁
蜀紅園に遊ぶ……………	三六頁
百草紀行……………	四二頁



武田櫻桃著

お酌日記

「叶屋の壽々女さん、あの位賣れたらば、儂だつてかうしちやア居ないわね。」

これが小勇姐さんの十八番なのだ。「かうしちやア居ない」といふ

て、そんなら什麼する了簡か知らないが、小勇姐さんだつて、さう
謙遜る事もなからうと思ふ。藝もあり、標緻だつて満更でない
限り、あれでもうちつと愛嬌があつて、毛嫌ひをしなかつたら、屹
度々々女さん位賣れずには居ない、家の大姐さんだつて、小勇
は今に賣れ出すつて云つて居る、何だつてあゝ毛嫌ひをするんだら
う、藝妓となつたからには、甚麼御座敷でも勤めなければならな
い、お茶屋さんを失策れば、自然世間が狭くなるに極つて居る、そ
れが小勇姐さんには譯らないのか知ら!

他人の事であるが、儂はいつでもかう考へると、小勇姐さんが氣
の毒でく堪らなくなる、見て居てさへ齒痒いやうだが、ヤツと此
間お披露をしたお酌の癖に、生意氣など思はれるのも何だから控え

ては居るやうなもの、性の合はない、意地のひん曲つた、其癖藝
だつて祿圖法ありもしない志乃婦姐さんの賣れるのに比べると、何
だか意地にも小勇姐さんを押出してやり度くもなつて来る。小勇姐
さんが看板頭になつたら、嘸嬉しいだらうと思つたり何かする。

志乃婦姐さんの方でも儂は嫌だ。妙に大人びたお酌だつてあるお
茶屋さんで素破抜いた相だ。大人びたお酌が什麼したんだい、いつ
迄も青洩をくツ垂しては居ませんよと口まで出掛たが、また大姐さ
んに叱られる事と思つて咽込んだ事を覚えて居る。だから志乃婦さ
んのお座敷つて云へば、いつでも藤子さんを連れて行く、藤ちゃん
最負だから、儂なんぞ懸けてよこしてくれた例はない。お酌が二人
も入るやうなお座敷になれば、一人は家の藤子ちゃん、一人は新松

葉屋の蔦ちゃんに極つて居る、家のお酌を跣足にして、他處の妓を貰ふなんて、第一大姐さんに對して不忠ぢやないか、だからいつでも玉數にして、一本で志乃姉姐さん、お酌で藤ちゃんが一番多い、威張られたつて仕方がないけれども、何となく面が憎くつて其度にまた小勇姐さんの意氣地なさか思ひ出される。

志乃姉姐さんは儂の事を大人びたお酌だと云つたさうだが、先づ第一明りを立つて戴きたいのは、藤子ちゃんが子供らしいか什麼だかど云ふ事だ。儂は小勇姐さんと待合さんへ行つて、騒ぎが濟んぢまへば、屹度お帳場で姐さんを待合して一緒に歸るか、さもなかつて姐さんが泊るとなれば、直ぐに御挨拶をして歸つて来る。第一着替へなんて生意氣なものを持たせてよこさせた事なんてありやアし

ない。年が一つ上だからつて、藤ちゃんなどは一人で待合さんへもづん／＼行けば、泊つて来た事だつてあるぢやないか、いくら儂より大人びてるか知れやしない。大姐さんは働さがあるやうに云ふけれど、あんな真似は、儂には未だ出来ない。何日か小勇姐さんと、表二階でお茶を挽いてた時だつた、小勇姐さんが荐りと考へ込んで居るから、儂は氣になつて堪らない。

『姐さん、何かしたんぢやないの？』

と云ふと、姐さんは真から情けないと云ふやうな顔をして、

『什麼もしやしないけれども、何だつてかうお茶ばかり挽くんだったら！』

お出でなすつたと儂は思つた。

『さうね、ちツと流行るやうにして、儂を懸けて頂戴よ』
腹の底から抉つて出たのでもなかつたけれど、それが什麼姐さんの
耳に響いたか。

『真個鶴ちゃんにやア氣の毒よ、儂が賣れさえすれば、お前さんに
だつてさういふお茶を挽かしのやしないんだけれど！』
かう云ふ時に少しは勵まして、せめては志乃婦姐さんの半分でも賣
らせたいと思つたから、

『云ひ過ぎたら御免なさいよ』
と冠詞を置いて、

『姐さんは、什麼してあゝお客様の毛嫌ひをするの？』
返事によつては捲し立て、思ふ存分の事も云つて、怒つても關は

な、一揉みに揉み潰してやらうと、鬚の根の緩む程頤でいやくる
と、姐さんは窓の柱へ凭れながら、

『まだ鶴ちゃんにやア解らないんさ！』

猫が鞠へ戯れたやうに、くるりと外されて、少しの外れた形のと
ほんとして其顔を贖て居ると、姐さんは真面目に儂の胸の邊りを瞻
めて居る。

『何が解らないの、え、姐さん、解らないつて、何？』

『だつて未だ鶴ちゃんは藝妓ツて家業を只お座敷を持つ商賣と心得
て居る向だから！』

『極つてるぢやないの！ お座敷を持つから藝妓ですわ』
隙があつたから、一本突込む！

『そりやアさうに違ひないけども、未だく辛い勤めの味を知らな
い中は、お前さんのやうに暢氣な事も云つて居られるわね!』
草を撲いたら、蛇が出た。反對に食ひつかれさうな按配になつて來
た。

『だつて、姐さん、毛嫌ひは損よ!』

さもく譯つたやうな事を云つて、何を云ひ出すか知ら、と釣つて
見たが、手答へは少しもない。

『お前さんだつて、屹度今に毛嫌ひをするやうになるわ……普通の

お座敷ぢやア無からうけどもね!』

異に搦んだ事を云ふものだ。普通のお座敷でなければ、待合さん
だ。普通のお座敷で毛嫌ひをする藝妓もなからうと儂は思ふ。

『待合さんへ來るお客様でせう、什麼してそれが不可くつて?』

『だから鶴ぢやんは嬰兒だと云ふ事さ、待合さんへ來るお客を一々
毛嫌せず勤められれば、それこそ新橋の死んだ小糸さんのやう
に土藏が建つわよ!』

志乃婦さんに大人びたお酌と云はれたものが急に嬰兒になつてしま
つた。こんな理窟があるものではない。大人になつたり、嬰兒にな
つたり、宛然活動寫眞のやうだ、今に眞向きの壁を自轉車で駈上つ
たり、底のある樽から潜つて出るやうな藝もするだらうと、自分で
何だか可笑しいやうな氣もする。

『いぢやありませんか、土藏が建てば。七三から分けになつたッ
て、それだけ徳ぢやないこと!』

『それがね……………』

姐さんも生意氣だわね、敷島を一本吸つけて、ふう——と烟を壁の方へ吹きつけながら、

『僕達には什麼しても、それがさう行かないのよ!』

『だって、志乃姉姐さんなんか、甚麼待合さんでもづんく行わ、あれでも毛嫌ひをするのか知ら』

『志乃ちゃんはある云つた性だから、毛嫌もないんだらうが……………まア性分さね』

『ぢやア姐さんは、甚麼も客様が好きで、甚麼またも客様が嫌ひなんだらう、我儘ぢやないか知ら』

『我儘かも知れないが、僕は一列一體に待合さんへ来るも客様が嫌

ひなんだね、かう云ふ家業だからと思つて、それは聘けられれば行くやうなもの、身を斬られるよりか辛く思ふわ……………騒ぐばかりのお座敷つてもものは掛いんだからね』

『ぢやア勤まりッとはなくつてよ、騒ぐばかりのお座敷つて、家へだつて滅多に聘つた事はありやしない、大概皆あの方だわね』
何の氣もなく云つたのだが、姐さんは大きく涼しい眼を睨つて、

『呆れたね! 鶴ちゃん』
と顔を見て、

『今ッからそれなら、鶴ちゃんは屹度賣れてよ!』
軽蔑じやうに瞰下して、また、

『鶴ちゃんは藝妓を何と思つて?』

妙なところへ外れたものだ。かう正面から訊かれると、何と云つていゝか譯らなかつたけれど、かうなれば姐さんに負けるものかと、別に考へもなんにもしなかつた。

「藝妓は、だからお座敷を持つ家業ぢやありませんかよ！」

「屹度、さうね」

「オア、儂、さう思ふわ」

「だから鶴ちゃんは暢氣さ。さう思つて居れば間違なし！」

延鏡に顔を映して、紙白粉で鼻の兩側を拭き始めた。

「藤ちゃんは能く待合さんへ獨りで行くわね」

何だか接穂ぎがなかつたから、かう云つて話を外らすと、姐さんはまた妙に鼻白いで、

「志乃ちゃんのお仕込だから仇はないさ、儂だつて志乃ちゃんの半分も腕があれば、お前さんを疾うに藤ちゃんのやうに仕込んで上げるんだけれども、なるたけ長い春を見させて上げやうと思つて、變に搦んだお客様はあつたけれども、御返事をしなかつたんさ。儂も餘程變り者さね、賣りたい〜と思ふお前さんの邪魔をして、そして何かお前さんから禮の一言も云つて貰ひたいやうな氣もするのさ、能く〜前世が悪ごいんさね」

譯らない事になつてしまつた。姐さんが儂の邪魔をして賣らせないやうにする筈がない、邪魔をして賣らせないものに誰が禮を云ふ莫迦があるだらう、姐さんは少し氣が變なのだと思つた。それぢやア賣れない筈だ、狂人に御祝儀を出して遊ぶ位なら、巢鳴へで

も行つた方がいゝ、もつと陽氣で、もつと面白いのがいくらも居やう、これだから姐さんは賣れない譯だ！

かう極めてしまつて見ると、もう何にも云ひたくないから、儂は只『さう！』と云つたまゝ階下へ降りて来て見ると、大姐さんの恐い顔！氣の故爲かも知れないが、餘り悚としたものではない！

秋の淋しい雨が一日降り通して、悵々とした夕方、鳥渡青空を拜ませたかと思ふと、今度は土砂降りの小歇もなく降續ける、こんな晩にはお座敷もあるまい、と云つて居ると其處へ兵庫屋さんと云ふ待合さんから、小勇姐さんへ口が懸る。

『姐さん、因果な晩だわね！』

と儂が云ふと、小勇姐さんも浮かなさうに、

『たま〜お座敷が懸れば、これなんだもの！』

鏡臺の前へべたりと坐つて、扮装を始めた。結ひ立の島田から水が垂れさうで、するりと脱いだ兩肌の綺麗さ、玉を延べたやうな二の腕のあたり、ふつくらとした乳房の工合、志乃婦姐さんに比らべたら、それこそ雪と墨との差ひ、什麼して磨いたら、かうも綺麗になるものか知ら、と見惚れて居る中に、小勇姐さんは美しい顔をいやくつて、

『鶴ちゃん、憚りさま』

これでもういつもの衣服を出してくれろと云ふ譯だ。假名にして十字ツきやない言葉が、足袋、長襦袢、下締、二枚重、帯、ばちん、

煙草入、櫻紙、これだけを取揃へる事となつて居るのだが、其處は馴れて居るから心得たものだ。姐さんの箆笥の斗抽から出すと云ふよりも、いつそ摺み出して、放散らけると、姐さんはまた小言も云はず、片端から手早に引懸けて儂の引張やうでも足りないやうに、脊負上げのあたりを鏡へ映す。

『新どんはもう箱を持つてツたのか知ら？』
 唧くやうに云つて、

『さうね、雨合羽を着て行かないぢやア！』

周章で、階下へ降りて行く。儂は行李から漸うの事雨合羽を引摺出して、追かけるやうに框のところへ来て見ると、姐さんはもう足駄を穿いて立つて居る、ひよいと着せかけて、大姐さんに切火を頼

まうとする途端、姐さんは振向いて、

『鶴ちゃん、今に迎ひによごすかも知れないから、的にしず待つて、』

雨の中を姐さんは前屈みになつて駈出すのだ。志乃姉姐さんの茶を挽いて居るのはいい、氣味だが、二階へ上つて顔を見るのも癪だから、大姐さんの長火鉢の前へ、ちよこなんと柱に凭れて跪坐んで見た、居心の悪いこと夥だしい。すると大姐さんは煙草を吸ひつ

て、
 『小勇の出る晩に限つて、碌な事アありやアしない！』

皮肉な云草とも思つたが、儂の事でないから我慢もしない、

『お前なんども、もうちツと賣れてくれないぢやア困ツちまふ！』

愈々我身の上となつた。こんな時に黙つて居れば、甚麽大きな雷が落ちまいとも限らないから、此方から甘ツたれて懸る。

『什麼すれば賣れるやうになるでせう！』

『什麼すればつて、お前……』

と云ひ淀んで、

『賣れるやうにしなければ、賣れッとはなからうぢやないか』

什麼したら賣れるだらうと訊けば、賣れるやうにしなければ、賣れつことはない、これでは蝕こッこの問答だ。大姐さんも随分長い間此家業をして居ながら、存外譯りのよくない人だと思つた。

『さうですか知ら！』

いつもの傳で素破抜けると、大姐さんも口を噤んで、雨の音を聞い

て居る。二階で志乃姉さんが二上りを弾き初めたが、相變らずポツンポツンだ。雨なんぞは別に稽古をしなくつても、降りさへすればポツンポツン云つて居るのに、何と云ふ不器用な人だらう。

格子が開いたと云ふよりも、閉る方が早い、がらびしやとまた障子。轉がるやうに新ごんが駆込んで来たかと思ふと、大姐さんに泥だらけの足を見られまいと、遠くから唐人髻の首を突出した。

『鶴ちゃん、小勇さんが直ぐ来て下さいッて！』

かくあらんと存ぜし故！お芝居ならば云ふところだ、屹度今に聘んでくれるだらうと思つたから、かうして窮屈な想ひもして居た『まア可かつた』と吐胸をついて、

『さう、有難う！』

と二階へ駈上つた。志乃姉姐さんは天神を無性にぎり／＼云はせて居る。其側に匍匐の藤ちやんが、ひよいと顔を上げて儂を見ると、『鶴ちやん、稀らしいわね、何處？』

この「稀らしいわね」が癩に觸る。何とでも云へど、自分の衣服を揃へて出して、いつもなら小勇姐さんに手傳つて貰ふのだが、誰が志乃姉姐さんなんぞに頼むものか、と不束ながら自分で着ては、よりをして居ると、

『御覽な、鶴ちやん、下前が下つてるぢやないか、第一襦袢の襟を御覽、合つて居やしない、どれ、こつちへ来て御覽！』

と志乃姉姐さん、いつかど心切めかす、口惜しいけれど、獨りではうまく行きさうもないから、我慢して側へ行くと、邪見にぐいと引

張つて、それでも見ツともなくないだけにはしてくれた。黙つて二階を降りるのも何だから、

『ちやア、行つて来るわ』

と云ふと、藤ちやんも蟲がいゝ、

『もしか大勢さんだつたら、儂も聘んで下さいッて、小勇姐さんにそ云つて頂戴！』

無駄を押すにも程があるものと心に思つた。雨合羽、下駄、傘、これは一切大姐さんの世話になつて、戸外へ出ると、いゝ塩梅に小降になつて居る。兵庫屋さんとは一町と離れて居ないから、犬にも吠えられず、摺硝子に兵庫屋と書いた軒燈の下を潜つて、台所の方へ廻ると、登音を聞きつけて、女将さんが帳場から聲をかける。

『鶴ちゃんかね?』

何日も氣さくない、女将さんだ、お帳場の隅へ雨合羽を脱いで、

『遅くなつて……濟みません』

と自分ながら可笑しい程濟し込むと、

『お客様が、先刻からお待兼ねだらうぢやないか!』

うそ、と可厭らしい眼つきをして自分の顔を讀みながら、

『大層好く結へたぢやないか』

『これ、女将さん?』

と手をやつて、

『何だか、根が締り過ぎて、痛くつてしやうがありませんの!』

『桃割は矢張りちツと大ツ振の方が格好がいゝね』

『でも、餘り大きいと可笑しくつてよ!』

二階でポン、と手が鳴ると、

『お急ぎなんだよ、松の間だからね』

『衝當りね!』

と念を押して、行かうとすると、燵番のお柚さん、周章て、湯氣の

ぼ、ぼと立つ燵徳利を袴へ突込みながら、

『鶴ちゃん、序でにこれを持って置くておくれでないか』

雛妓は成程徳利を持つのが商賣とは云ひながら、お燵番の癖に、序

にこれをは何事だい、失禮なやつとは思つたが、女将さんに免じて

我慢をして、

『あゝ、さうだつたわね』

と請取つて、二階のお廊下へ一先づ徳利を置いて襖を開けた。

『今晚は……』

お辭義をすると云ふよりも、身體を異に捻つて見せるんだ。手を延して徳利を取るが早いか、小勇姐さんの側へ坐る。

『早かつたわね』

つんどしてかう云ふのが小勇姐さんの癖だ。もう少し何とか味をつけたらよさうなものとは思ふが、大一坐に、『さア散ばつて〜』と婆ア藝妓に叱られるから見たら遙かに愛嬌がある方だらう。

『これが君、鈴むらの鶴子と云つて、未來有望のスマールさ！』

いつ來ても罪のない事を云つて笑はせては、獨りで嬉しがつて居る瀬木さん、名は富美雄と云つて、何處かの會社員ださうだが、月

に二三度は小勇姐さんへ口を懸けて、其中の一度は屹度また儂を聘んでくれる。見たところでは眼の大きな、頬の凹けた、好い男と云ふ方ではないが、いつでも氣の軽い、淡泊とした、氣前のいゝ方を嫌ひの小勇姐さんが、此人の座敷ばかりは可厭な顔をせずに勤めて居る、いつかも烏渡惚氣た事なんぞがあつた位。其人が斯う云つて同伴を見たが、同伴と云ふのは未だ一度もお目に懸つた事のない人で、瀬木さんから見ると十から先き老けて居るだらう、達磨のやうな顔をして、鼻先へ金縁の眼鏡を懸けて、裸體にしたら嘸置物の布袋のやうだらう。洋服の釦が弾切れさうに懸つて居る、これは返事もしらずに儂の顔ばかり瞻て居るから、何だか極りが悪くつてしやうがなう。

「あ、い、雲らく逢はなかつたぢやないか！」
茶卓臺へ肘をついたまゝ、酌をさせて、瀬木さんは妙に片づけながら、かう云つたが、

「鳥渡見ない内に、恐ろしく大人になつたもんだな！」

「そんな事ツて！ ぢやア、何だわ、二年も逢はずに居れば、お婆さんになツちまふわ、ねえ、姐さん！」

小勇姐さんの手を把つて振りながら、まぢく〜と瀬木さんの方を見ると、姐さんは嚴う敷島の煙を吹きながら、

「だから、儂達は嘸お婆さんに見えるんでせうよ！」

「ハ、ハ、ハ、ハ、」と高く笑つて、

瀬木さんは猪口を明けて洋服へ獻す。

「お酌！」

と故爲と痾聲を張上げると、洋服は吃驚したやうな顔をして、儂を見て、

「餘り、一杯注がんやうにの！」

恐ろしい太い聲だ。

「瀬木さん、貴郎此前何日いらして？」

「俺かい？」と擲けるやうに云つて、

「久しく來なかつたな」

「久しくぢやなくつてよ、ちツと姐さんの心にもなつて見て頂戴な、毎日〜貴郎の事ばかり云ひ暮して居るぢやありませんか、姐さんにはかり待たせて置いて、顔も見せないなんて、罪です」

わよ！』

『大變だわね！』

と姐さんは云ひ消したが、老成た事を云ふものだど心では思つたらう、

『何かお踊りな？』

『萬望！』

かう云つて更まるのは家業柄の御規則。下からお花さんと云ふ女中が上つて来た。

『姐さん、箱は来てませうね？』

小勇姐さんの聞くだけ野暮、箱はもうちやんと後ろに来て居る。

『小勇さんは、瀬木さんが被入ると、これだから困ると云ふのさ、

お前さんの眼にやアこれが入らないの？』

と云ひながら、仰反るやうにして、後手に三味線を引寄せる。

『まア、何てんでせう、儂真個に什麼かして居てよ』

調子を合はせて、小勇姐さんは儂を見据へるやうに、

『何を踊ること？』

『御所車〜！』

と瀬木さんが大きな聲。いつも瀬木さんは御所車を踊らせるに極つて居る、其後でサハサ節やら、深川節やら、何でも罪のないものが好きらしい、それとも通がつたものは御存知ないのかも知れない。

自分でもさう思ふ、何故あゝ踊る時には澄まさなければならな

いだらう。他人が踊つて居る顔を見ると、可笑しい程澄ましたもんだ。いつか活動寫真で西洋の踊を見たが、皆半分笑ひながら踊つて居た。恐い顔をして、狂人のやうな眼をして踊つたところで、それが何の樂みになるだらう。自分の濟すのが氣恥かしいやうに思はれてならないが、兵隊さんの訓練の通に教はつた踊の手だから、笑つては中々うまく行くものではない。萬遍なく手と足を働かせて、可笑しな眼遣ひをして『枕かたしき夜もすがら』と舞ひおさめて、御規則のお辭義と來ると、譯りもしない癖に手なんぞを叩いて居る。瀬木さんが矢張それだ。けれども今夜程好く踊れた事はないぞないそれはいつも瀬木さんの連節がついて廻つたら、踊り憎い事大變だ。『明けて嬉しき』を姐さんが弾いて居ると、瀬木さんの唄はもう

「雪に想ひ」へ飛んで居る。これが自動車踊と云ふので、ステテコも格別異つた事はない、今夜はそれだけ助かつた。瀬木さんも洋服の手前らと慎みの形ちとあつたのだらう。すると黙りの洋服が、『今度は俺が羅生門を唄ふから、一つ活潑に踊つてくれ』と云ふ注文、さア大變、瀬木さんでさへ持餘して居るところへ、あの太い聲で調子ツ外れをやられては、それこそ兎も鉦も入らなくなる。まゝよ、調子ツ外れ並に踊つてやれと云ふ了簡。『姐さん、よくつて!』と聲を懸けて、いよ／＼羅生門の始まりだ。躍氣に股を突張つて、『丁度いゝわね、雨が降つて居るから、羅生門のやうな晩だわ』と振向くと、洋服は四斗樽のやうなお膝へ手をやつて、

『これから唄ふぞ！』
劍術の道場へでも来たやうな気がした。さア唄ひ初めると、うッ、かりすれば姐さんの三味線の方が危い位、いッ、聲で、節廻しもゆつたりとして、什麼してあんな顔から、あッした聲が出るのか知ら、して見ると先刻の太い聲は地聲ではないのだらう、と考へながら夢中で踊つてしまつた。

『まア何ていッ、お聲なんでせう、今度は貴郎二上り新内か何か聞かせて頂かうぢやありませんか！』

お花さんが沁々感心したやうに云ふ。

『實際、見懸けによらん聲を出す、君も随分山郭公の方だからね』
と瀬木さんが立つた後から、小勇姐さんも續いて二階を降りて行つ

た。

瀬木さんがふらりと上つて來ると、小勇姐さんも、續いて襖際から顔だけを突出して、

『鶴ちゃん、鳥渡！』

と小手招き。中貫ひでも來たのだらうと側へ行くと、

『お前さんに少しお帳場で話があるよさ！』

こればかりは謎が解けない、お客様に失禮をした覚えもなし、お帳場で譴責を食ふ氣遣もなし、また擔がれるんぢやアないか知らども思つたが、兎も角もお帳場へ來て見ると、女將さんはいつも如才なく見迎へながら、長火鉢の前へ坐らせて、

「鶴ちゃん、大概の話は小勇姐さんからお聞きだらうね？」
 謎はだんく、深くなるばかりだ。小勇姐さんはお帳場に話があるからと云ひ、女将さんはもう姐さんから大概の話は聞いたらうとある、無線電信とやら云ふものは、大方こんな事を云ふのだらう。狐に魅まれたよりも未だ酷い迷はせ方だと心に思つた。

「いゝね、何にも！」

と云ふと、女将さんはまた妙に洗みながら一吹して、

「さうかえ、ちやア儂から口を切る事にするけれど……お前さんも家では始めての事でもあるしするから、儂も云ひ憎いが、姐さんもお前を今夜是非泊めたいッて云つてるのさ！」

『それは泊まるのは關ひませんけれど、彼方の洋服を召したお客様

に、未だお對手がないやうですわね！」

其位の事を察しない儂ちやアないけれど、袋井と云ふ待合さんで、此春こんな事を聞かされて、感づかずに茫然してる中に、既の事に藤ちゃんのやうな目に遭ひかけて、裸足で逃げた事である。莫迦にして貰ひますまいと云ひたかつたが、蟲を殺して恍惚けてやるど、女将さんも開けないね。

『あのお客様のお對手に家でも困つて居るのだから、お前さんに無理を頼まうと云ふ譯さ。お前さんだつて他所ちやア随分泊つて來る事もたありなんだらうから、家だけ堅くして居る事もなからうぢやないか……なアに、鶴ちゃん、年は少し老り過ぎて居るけれど、眞個に氣の好さうな方だわね、あゝ云ふ爲になるお客様を

どらないぢやア、まつたくの事一生の損さ……え、好いだらう
ね！」

何と返事をしていゝか譯らなくなつた。いづれは其處へ落ちる事と
想つて居たものゝ、さて裸足で逃げ出す程の氣も出ない、もちゝ
して居ると、

「好けりやア、二階へ行つておくれ、お前さんが居ないと淋しいわ
ね！」

頭をさへ振らなければ云ふ事を聞いたものとするのが此商賣の常で
はあるが、犬のやうにチン／＼をした覺えもなし、不承知は云はな
いが、承知もしない、誰がそんな生ツちよるい事で承知が出来るも
んかと思つた。

「儂……兎も角も姐さんに訊いて見ますわ！」

「姐さんは、もう承知してるんだつて事さ」

と云ひ擲て、急に女将さんはそは／＼しながら、

「さア、鶴ちゃん、二階へ行かう。儂も一緒に御挨拶に行くから……
……」

其處にある羽織を引懸けて出懸けやうとする。

「あら、女将さん、鳥渡待つて頂戴よ！」

追絶つて、儂はお帳場を出ると、

「鶴ちゃん！」

と暗黒から涼しい聲。小勇姐さんは眩しさうに電燈の下へ來がら、
「鳥渡、鶴ちゃん、今夜と云ふ今夜、儂、鬼になつて、お前さんを

「賣らせるやうに仕込んで上げるよ！」

「え？」

と振仰ぐ顔を見て、

「鶴ちゃん、お前さん可厭だと思ひなら、今の中さう云つておくれだが、儂瀬木さんへの義理で、什麼してもお前さんの身體を借りなけりやア濟まない事になつたんさ、それに始め何するにやア、あゝ云つた年の老つた人の方が、思遣りがあつていゝとも思ふしするから……大抵の話は女將さんから聞いたらうと思ふけれど、萬事儂に任せて置いておくれでないか！」

女將さんの笑ふ聲はもう二階から聞えて居る。小勇姐さんの口からこんな事を聞かうとは露思はなかつた儂は、什麼返事をしたら好か

らうと、有繫に咽と息詰つて、稀らしさうに電燈を瞻めて居ると、『ね、どうせ儂も泊つて行くんだから、お前さんもまア泊つて見て藤ちゃんに鼻を明かしてやるがいゝぢやないか、たほッべらに着替を取りにやつて、一泡吹かせてやりたいと思ふんだがね！』この姐さんの言葉がぐつと氣に入つてしまつた。志乃姉姐さんや藤ちゃんに鼻を明かしてやりたいと思つて居る事は、今日に始まつた事ではない。面の悪い藤の奴に鼻を明かす、これでもう甚麼辛い事でも辛抱をして見る氣になる、誰だつて始めはこんな羽目があつてあゝして藝妓でございと澄すものに極つて居る、動機と云ふものがなければ慕は開きも縮りもしない。什麼なるものか！明日の朝の藤公の面が見て遣りたい、定めし吃驚するだらうと、そんな事ばか

り考へられる、

『ぢやア儂、可厭と思へば、姐さんどころへ逃げてツてよ！』

『あゝ、いつでも逃げてお出で、眠い目はさせないわね！』

それでも何だか不安心のやうな気がしてならない。二階へと上がつて見ると、女将さんが瀬木さんを對手に拳の最中だ。洋服はど見ると大の字形に引くらかへつて、片足を不法法に食卓の上へ載せかけて、すや／＼と寐て居るらしい。あの唄の聲は耳に残て居るが、もう一度顔を見てやらうと、延上つて見ると両手を枕に組んで、心持好さうに臥て居るのであるが、もう一寸も其手が伸びたら、枕頭の水呑の麥酒を壘へ飲ませさうに思つたから、瀬木さんの後ろを通つて、水呑を取らうとする途端、洋服の枕にして居た手が延びた

かと思ふと、突然儂の手を捉へて、達磨様のお目覺め！

『おい、幾歳になるかね！』

相變らず太い聲だ、唄の時だけ此人のは變るんだと見ゆる。

『可厭……儂、逃げるわ！』

と振放さうとして、不圖小勇姐さんの顔を見ると、ぐいと一つ睨まれて、什麼する事も出来なくなる！

『まア、さう逃げんども好え、踊は感心ぢや、うむ、感心にうまい

ものぢや、感心……感心……』

いつか大姐さんの阿父さんと云ふのが熱病に罹つた時、こんな囁語を云つたものだ。何だか見たところからぶく／＼して熱病のやうな人だから、こんな事も云ふのだらうと思つて居る中に、いつか洋服

は儂を横抱きにしなから起き上つて、左りの手で水香を掴むと、儂に飲ませやうとする、氣障な客だ。置注ぎの麥酒なんぞ誰が飲んでやるものかと思つたが、また姐さんのぐいが恐いから、恐々おちよぼ口を持つて行くと、

『ドン、ドン、ドゥーン！』

と恐ろしい聲を出して、拳を打ち上げた瀬木さんは、逆に反つて笑ひながら、

『いや、お睦まじい事だ！』

と云ふと、女將が後に踵いて、

『何て異なる格好なんでせう！』

袋鼠が雛ツ子を抱いたやうな形ちだらう、姐さんはと見ると、知ら

ん顔を火鉢へ突込むやうにして、スバク煙を吹いて居る。

『什麼かね、似合ふかね？』

洋服もいゝ加減にするが、似合ふ筈がないぢやないかと云つてやりたかつた。それもいゝが、話をする度に腹へ波を打たせるから儂は船へでも乗つて居るやうな氣もすれば、いつ暗礁へ乗上げる事かと思へば、心細くもなつて来る。お花さんが階下から上つて来たかと思ふと、何か瀬木さんに耳打ちをする。瀬木さんは心得て立上ると、小勇姐さんも其處にある敷島の袋を掴んで、忘れ物はあるまいと云ふ顔で立つ。女將さんはさよとんとして曇らく食卓と睨めツ子をして居たが、瀬木さんと小勇姐さんの影が見え無くなると、

『ソア、貴郎も』

と洋服の膝を衝いて

『彼方へ被入いませよ!』

宛然お茶番さ。世間の事は皆こんなものかも知れないが、皆でお茶番をしながら、皆で真面目だから、なほ可笑しい、面白い家業もあつたものだ!

昨夜の雨は霽れて、日は高い。湯豆腐でお客様は迎へ酒、これが粹なのか知らず可笑しく思つた。體裁ばかりで甘味い事は少しもない、酒の肴には未だ好からうが、これで御飯はちと淡泊! 矢張家の若布の味噌汁の方が性に合ふのだ。昨夜の騒ぎに引かえて、今朝の照れさ加減、瀬木さんは蒼い顔、洋服はむんづり、小勇姐さんは後

れ毛を搔き上げながらまぢくして、御飯も一膳で箸を置いたやうであつたが、此間にも心配さうに顔ばかり見て居る、何故あゝ他人の顔ばかり贖るのか知らず又思つた。

お客を送り出して元のお座敷へ歸つた時は、もう十一時近くでもあつたらう、いつも来る煮豆屋の鈴の音がして、暑はもう窓の障子に薄れて居た。吸壳澤山の火鉢を圍うと、小勇姐さんは沈んだ調子で

『昨夜は……什麼だつたえ?』

さもく大した事でもあつたかのやうに訊く、何故あゝ姐さんは苦勞性なのか、何處まで損に生れたのだらうと思ふと、氣の毒にもなつて来る。

『什麼ッて……別に何でもありませんわ!』
 思ひ懸けもないやうな顔をして、姐さんは昵と僕の顔を讀みながら、

『何日逃げ出して來るかと思つて、甚麼に氣を揉んだらう!』

『何故……姐さん?』と云ふと、

『だつて、お前さん……始めてぢやないか!』

成程待合へ泊つたのは始めてだが、承知の上で泊つたからは、それが可厭だと云つて、姐さんのところへ逃げ出して行けた義理ではない。あんな事ならば此前にも、もうくくづつと前にも家へ逃出すんぢやなかつたに、今更自分は思ふ位だ。

『何でもありやアしないわ、僕、あんな事ならこれからいつでも姐

さんと泊つて見せるわ!』

『鶴ちゃんは……まア!』

と呆れたやうに云ひ擲て、また屹と姐さんは僕を見る。

『お前さんは猫ッ冠りね!』

猫ッ冠り! 何が猫ッ冠りなんだらう、姐さんも餘程妙な人だ、冠りもしないものを冠つたと云ふ、泊れならいつでも泊つて見せてやると思つたから、

『何が……僕、猫ッ冠りなの、猫なんざアこれんばかしも冠ッちや

ア居ないわ、藤ちゃんなら冠るかも知れないけれども……!』

『猫ッ冠りぢやないか、僕に今迄嘘をついてお居でだもの、猫ッ冠りさ、大猫ッ冠りさ!』

懸谷をびくりとさせて、躍氣に吸つけて、

『自個に散々ばら世話を焼かせて置いて、よくさう白々しくして居られるわね！』

と憤になつて坐り直す、何の事だか薩張俯に落ちない、此方も少しは憤になる。

『儂、何か姐さんを騙した事があつて！』

『あるともさ、お前さんの胸に訊けば譯る事ぢやアあるけれど、云つて聞かして上げるわよ。いゝかえ、鶴ちゃん、お前さんは泊りこそしない、昨夜のやうなお座敷を勤めた事がおありなのだから、それならそれと始めツから云ひなら、儂だつてあゝも心配はしないわね。しどう、白々しく處女のやうな事を云つて、儂が

此處の女將さんに甚麼に氣不味いか、お前さんにだつて其の位な考へはありさうなものね！』

大姐さんや姐さんの云ふ事は、何でも謎で出来て居る、結末まで訊かなければ、其謎がまた解けないやうに出来て居る。お客様の云ふこともそれだ、待合の女將さんや姐さんの云ふ事が皆謎だ、踊のお稽古よりも、この謎を解くお稽古の方が餘程六ヶ敷い。

『譯つてよ、姐さん！ それは儂が餘り平氣で居るから、姐さんがさう感ぐるのは道理だけれど……昨夜……儂、些ども恐い事はなかつたんですもの！』

『だからさ、それが受取れないぢやないか、儂なんぞは、突懸け一本で出たんだから、勿論生ではなかつたけれど、始めてのお座敷

の時は、恥かしいのと恐いので身體が慄へたばかりでなく、翌
 る朝顔まで蒼かつたものさ。それが、お前さんはさうでないだ
 から、豪勢だと思つて、獨りで感心して居るんだわね』
 猫ッ冠りから感心と来れば愈々謎に相違ないが、儂はついぞ姐さん
 のやうな想をしないのだから仕方がない、何だか洋服が愚圖く云
 つてる中に寝ちまつて、眼が覺めたら戸の間隙から日が映つて居た
 ばかり、些とは男臭いやうな氣がしたけれど、別に何とも思はなか
 つた、姐さんはそんな事とは知らないのだ、だから種々な事を云ふ
 のだと、少しは謎が解れて来る。

『儂……昨夜は能く寝ちまつて、何にも知らなくつてよ、お客様が
 歌舞伎座へ連れて行かうなんて云つた事は覺えて居るけれど……』

『屹度、さうね!』と念を押して、

『そんな事ツてある筈がないぢやないか!』
 階下から女將さんがのッそり上つて来た。兩個の間へ割込むと、

『何だね、先刻から聞いてれば、諍論をしてるんだねえ、鶴ちや
 ん、お前さんが瀬木さんを寝取つたと云ふんぢやあるまいし、小
 勇さんもいゝ加減にするがいゝぢやないか!』

百萬の味方を持つたより嬉しかつた。すると姐さんはまた急に洗ん
 でしまつて、

『別にさう云つた譯ぢやアないんだけれど、ねえ、鶴ちやん!』
 と儂の方へ眼を反らす。兩方から鶴ちやん! 鶴ちやんは大持てに違
 ひないが、これもまた謎だ、解き損つてうっかりした事でも云はう

ものなら、今度はまた両方から刃のみと思ふから黙つて居ると、

『昨夜見たいなお座敷なら、鶴ちゃんはいつでも勤めますつてさ』

『女将さん、當節のお酌さんは違つたものね！』

譽めるんだか、貶すんだか、これも謎だから解らない。

『さう？ 鶴淵さんは此位な妓ばかり遊ばせつけてお出ださうだか

ら、皆また妙に馴染んじまふんだつてね……また彼の方が見えたり

ら鶴ちゃんに来て貰ふわ！』

真面目とも受取れないが、串戯とは尙受取れもしないから、儂は妙

に片づけて、

『萬望！』

と云ふと、姐さんは肝を潰したやうな顔をしながら

『鶴ちゃんはまだマツたく腕があるわね』

まだ變な事を云つて居る、女将さんも少しは驚いて居たものらしい、

それからは何にも云はず、火鉢の中の吸壳を火箸で叮嚀に取り

始めて、台十能へ山と積んだのを窓際へ押やつたが、

『もうお晝だから、御膳でも食べてお居でな』

これもまた謎の一つだ。解いて見たら、掃除をするに邪魔だからお

歸りと云ふ事になる、姐さんは器用に解いたものだ。

『あら、女将さん、儂達はたつた今食べたばかり、お腹なんか減く

もんですか、もう十二時なんて、日が短かいつたら、無益らない

事を云つて居ずと歸りませう、女将さん、什麼も難有うございま

した！』

慇懃なものだ。お客様へよりも女将さんにするお辭義の方が餘程低い。成程お客様よりも待合さんが大切に違ひないと僕は思った。『追ッ立てたやうだね。ちやまた夕方暇でもあつたら遊びにお出でな、甘納豆でも御馳走するわね』
 と今度は僕の方を見て笑ひながら、

『これで鶴ちゃんは、十日か二十日お茶を挽かうと、大姐さんの可厭な顔を見ずと済む事になるんだね、家へ歸つたら藤ちゃんに威張つてやるがい！』

何處まで謎がついくか解らない、焦つたい程種々な事を云はれる日だ。これが姐さんなんぞは身を切られるよりも辛く思つた一つだらう、氣が弱いんさ、僕はお茶を挽いて種々な事を云はれるよりも、

この方が餘程氣樂だ、大姐さんだつて悪い顔はしないだらう。そうだ、それよりも面の憎い志乃姉姐さんや藤公が、甚麼顔をして自分を迎へるだらう、一番先さへ見たいのはそれだ。勝誇つた大將の顔のやうに、勇みはあつても、氣の映すやうな事は一つもない。あんな考へだから、お座敷が長く續かないんだと、悪い事かも知れないが、小勇姐さんの臆病を莫迦にするやうな氣がしてならない、自分丈は大威張だ。

お座敷から午前歸つた事のない僕は、鈴むらと書いた軒燈さへ、何の事はない、他家のやうに思はれて、いやに明るく、そしてまた可厭に煙つたいやうな氣がするのであつた。大姐さんは甚麼顔をし

て居るか知らと思つて茶の間を覗いたが、留守！新殿に訊くと、先刻浅草の叔母さんのどこへ行つたか云ふ、氣楽なものだと思つた。便所へ行つて、手を洗つて居ると、小勇姐さんはもう衣服を着換へて、二階を降りて来た。

『鶴ちゃん、早く衣服を着換へておしまひな』

かう云ふと、火鉢の向ふへ坐りながら、新聞を読み始める。何を讀むのか譯つたものぢアない、字を一々拾つて居るのだ。何しろ續き物一つに二時間もかゝるのだから、一枚讀切るにやア三年もかゝるだらう！

儂はかう思ひながら二階へ上る、折角顔を見てやらうと思つた藤公は居ない。志乃姉姐さんが猫脊を圓るくしながら何か荐りと書い

て居る。チエツ、チエツ、チエツ、と氣のない舌打をして、振仰いで、

『えい、何う書いたツけかね、おやくそくと………假名にしちまうか知ら』

不圖儂の居るのに氣がつくと、書いただけのところをぐるりと巻いて、

『あら、鶴ちゃん、昨夜はお芽出度う！』

泊つて来るのがお芽出度ければ、お通夜なんぞもお芽出度くなければならない。自分だつて無間斷に芽出度い癖にと口まで出かしたけれど、又犬の糞の復讐が恐いから廢してしまつた。

『やくそくツて字、教へて上げませうか？』

着替への裕を脱いで平常着になりながら、志乃姉さんの側に落ちて居た書損ひの文句を讀んでやると、新どんよりも酷い手だ

「先じつはおいで被下候處あんまりこけな事を申し、うちへ歸つてもおかしく、今度はもつとこけな事を云はうと、よせへ行つてべんきよして居り候……」

志乃姉さんは學校へ行つた事がないと見える。成程この分ではおやくそくの約と云ふ字が本字で書かれさうな筈がない、こけな事は滑稽と云ふ事だらう。滑稽ならばつづの字が落ちて居る、いづれお馴染へ遣る手紙に違ひないが、先方でも無名筆には驚くだらう。

「おやくそくのやくつて字は木扁に何て字を書くんだけか？」
「糸扁だわよ、糸扁に勺つて字よ！」

「さうく、糸扁く！」
と云ひながら、書いたのを見たら人扁だ、東の字は東を誤魔化してしまつた。其後へゆびわど大きく書いて、きつとくくく持つて来て被下度候、は餘り蟲のいゝ話だ。文錢の指環でもある事か、この手紙で二十四金の眞珠入を釣らうと云ふ魂膽だ、この位冥利の悪い稼業はない。

「お前さん、昨夜、兵庫屋さんだつてね？」

「えー！」

と云ふと、滲々儂の顔を見て、

「鶴ちゃんも、一人前になつたわね！」

袂から鹽蜆豆を出しては、ぼつりくやつて居る、お座敷でいくら

品をつくつても、家では此態だ、大概愛想が盡きるだらう！

「藤ちゃんは何處かへ行つて？」

「何處へ行つたらう、あの人のこつたから、屹度また田ごさんの

お帳場へでも行つて遊んでるんだらう、暢氣な人さね！」

「姐さん、昨夜家？」

態を見ろ、お茶を挽いたらう。今朝の自分を見てくださいと云はないば

かり、儂はから突込んで、何と云ふだらうと雲らく顔を讀んで居る

ど、

「池の尾さんさ、一時頃歸つて來たから、眠くつてしやうがないわ

ね！」

嘘は云はないだらう、それにしても昨夜こそはと思つたものが、矢

張お茶を挽かずに居る、

「藤ちゃんは？」

「菊壽見さんだッさ！」

此奴も出て居る。して見ると一列一體だ。只泊つたと泊らないの差
だ、格別威張れる譯でもないど少し消氣する。

「泊るお客様が一番糟さ、時間で切上げられないのも困るけれど、

泊られると随分お荷物さ！」

今度は逆にお出でなすつた。泊るお客様よりも、儂達を糟ど云はな
いばかり、口惜しいツたらありやアしない。

「泊るお客様だつて、別にさう懊惱い人ばかりでもありませんわ、

昨夜のお客様なんてそりやア好い方！」

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

と志乃姉姐さんは大口に笑ひながら、硯箱の蓋をすると、

「ぢやア、鶴ちゃんには時間過ぎのお客様ばかりが性に合つてると見えるんだね！」

「まア、さうかも知れせんわね」

と云つてやると

「蠣壳町へ行くといゝわ！」

水天宮様ぢやあるまいし、蠣壳町へなんぞ行くものか、何だつてまた姐さんはそんな事を云ふんだらう。一體此頃は解らない事を云ふのが流行るかも知れない、此方からも一つ脅かしてやれと思つたら、

「今に帝劇があくつて云ふから、姐さん安心してゐるが、いゝ事よ！」
これなら譯る筈はあるまい、自分にも譯らないのだから、先方では定めし驚いたらうと思ふと、志乃姉姐さん、急に先刻の手紙を擴げて、硯箱の蓋を撥ねる、

「さうく、鶴ちゃんに云はれて氣がついたわ、儂、席割の札の事を書き落しちまつてよ！」

あ、不可ない！ もうくどても志乃姉姐さんには敵はないと思つた。

「鶴ちゃん……御膳ですよ！」

大きな聲だ。お隣まで聞えるだらう、家に尊者は居ないよと、平常大姐さんに叱られながら、あれが新ごんの地聲だから仕方がない。

『はア！』

と負けないやうに大きな聲を出してやつた。志乃姉姐さんは、先刻彌助を誂へてあると云ふから、獨りで二階を降りて見ると、于鱗の二疋づけに小皿に香の物が二切れ、これでもまだ御馳走の方だ、食卓の向ふへ坐ると臺所から新どんは聲をかける、

『鶴ちゃん、今日の干物はひりくしやしないかえ？』

『鹽は辛くないけれど、小骨があるわね！』

『小骨があるどさ、小骨があつちやアやり切れないね！』

小勇姐さんはかう云つて新どんと顔を見合はせながら笑つて居る。

『だつて、こんなにあるぢやありませんか！』

箸の先きにつツかけて見せてやつた。新どんは轉げるやうに笑ひな

がら。

『洋服にそんな小骨があつたかえ、そいつは見世物だ、ねえ、小勇さん！』

また徐々譯らない事が流行出した。干物の事を云つてるかと思ふと、直ぐに洋服に變つて居る、洋服に小骨があつて堪るものかと思つた。

『新どんは、何がそんなに可笑しいんだえ？』

餘り癪だから怒鳴つけてやると、憎らしい！ まだきや、ツツと云ひながら、

『可笑しいわ、ねえ、小勇さん！』

姐さんの方を見ると、これも一緒になつて笑つて居る。

『いゝ事よ、たんと笑ふがいゝ、大姐さんが歸つて來たら、そ云つてやるから！』

お茶漬をさく／＼と一口に掻込んで、擲けるやうに箸を置いた儂は、小勇姐さんまでが憎くなつて、顔を見て居るのさへ可厭だから、仲好の菊ちやんとこへでも行つて見やうと一足茶の間の敷居を跨ぐ途端、戶外から這入つて來た藤公と衝突つた。藤公は何と思つたか、一足後へ下つたが、

『鶴ちやん、兵庫屋の女將さんが今お前さんの事を褒めてゝよ！』

『さう？ 藤ちやん、そんな事何處で聞いて』

『兵庫屋さんへ寄つたら、鶴ちやんは隅に置けない妓だつさ！』

小癩な事を云ふやつだ。隅に置けなければ中央に居るだけの事だ。

褒めたんぢやない、貶したんだ。もう／＼兵庫屋へなんか行つてやるものか！

『何とでも云ふがいゝわ！』

その儘不意と戶外へ出てしまつた。小勇姐さんと、藤公と、新さんと、一度に咄と笑ふ聲！、聞き流して菊ちやんの家へ行つて見ると、菊ちやんはお稽古をして居る、烏邊山だ、藝が好きで、儂を見ても瞬ぎもしない、何だか小憎らしくもなつて來る、『また來るわ』と其處を出た。何と云ふ石鹼の觸廣告が、吾妻囃しでやつて來た。かち／＼かちと火の用心ぢやあるまいし、惚けて囃しをとめて口上を演べ始めた。能く透る聲だ、あの聲で長唄のお稽古をしたらばど不圖其顔を見ると、昨夜の洋服にそツくら！

不思議

自分で吹出した。

六

四日ばかりするとまた兵庫屋さんから御座敷。屹度あの洋服だらうと小勇姐さんは云ふ。出て見ると矢張それだ、不相變默然として自個の顔ばかり見つめて居る。

『義理ですから、ね、いしでせう？』

どうく小勇姐さんへ口を懸ける。瀬木さんが来ないから、何だか坐が白けるのを、姐さんは種々んものを、引搔廻して、可也賑かだつた。姐さんは九時頃に歸り、儂は時間まで居た。随分執拗い事もされたけれど、別に可厭とも思はない、氣の好ささうな人だ。お花さんは京橋の方の銀行の頭取だと云ふ。鶴淵さんと云ふ苗字も可笑

いが、名が餘程可笑しい、兵右衛門、忠臣藏の茶屋場へ出さうだ。『貴郎の妹さんは什麼なすつて？』と翻弄つてやつたら、眞面目な顔をして、

『お輕は二階で延鏡！』

だつさ。六ヶ敷いやうで捌けた人だ。散々惡戯けて、麥酒樽のやうなお腹へ『へゝのゝもへち』を書いてやつた。それでも怒らない、考へて見るとお客様つてものは什麼云ふ氣だか譯らない、電車へ乗つて見ると、洋服を着た人も随分居るが、皆澄した顔をして、烏渡觸つても怒られさうだ。それがお茶屋さんへ來ると小兒のやうになつてしまふ。鶴淵さんだつて、もう彼此五十に近いんだらうが、お花さんなんぞ鶴ちやんなんて呼んで居る。鶴ちやんが兩個居る譯

だ！

「鶴ちゃん、今度被入つた時にいゝ事をして遊びませうね！」
 お女将さんまでが子供扱ひにして居る、其筈だ。鶴淵さんもあんな顔をして居ながら睨めツ子なんぞするんだもの、家に居てもあゝか知らと思ふと、可笑しいやうだ。お金を遣つて、莫迦にされて、全體何が面白いのか知ら、あの位なら紙幣を束にして、溝の中へ放擲る方が、甚麼にさばくするか知れやしない。猪首へ羽織の襟が搦まつて紋どころが脊筋を外れて居やうが、親指の先が破けて眼を睨いた足袋をはいて居やうが、猫ぢやらしにした帯の端から、正札の耳がぶら下つて居やうが、皆お女将さんに云はせると、「何て御様子がいゝんでせう！」これで御様子がよかつた日には立坊も御様子の

いゝお仲間だ、お客様はそんな淺薄なお世辭にでも我慢して、嬉しがつて居る、屹度内へ歸つて何處が様子がいゝのか知らど、鏡を見るに違ひない。鶴淵さんだつてさうだらう。「これでも十七八の氣だ！」つて餘り若過ぎると思ふが、小勇姐さんを對手にして、「亭主出たり嬪出たり」なんかをやるどころを見ると、さうかも知れない、成程銀行で恐い顔をして居るよりも、閑とお金があれば、兵庫屋さんへ来て悪戯けて居た方が面白いかも知れない、して見ると満更にお紙幣を束にして溝へ擲てるやうなものでもなからう。
 三日置きに屹度來ては、儂を呼んでくれる。そしていつでも益らない事を云つて、獨りで嬉しがつて、儂の身體を人形か何かのやうに、擦つて困らして見たり、抓つて泣かせて見たり、大きな聲を立

てさせたり、これが大抵二時間ばかり、此方だつて負けやしない、引掻いてもやる、擲つてもやる、爪の先きでぎゅつと抓つてやつたら『痛い〜!』つて先方から謝まる、何の事はない子供の喧嘩だ。そして其揚句にお小遣ひつて一圓もくれて行く。『鶴ちゃんはい旦那が出来て結構ね!』と志乃姉姐さんが云つたが、まつたくの事いゝ旦那だ。洋服だなんて丸んだのが、今になつて見ると勿體ないやうだ。

小勇姐さんが待焦れて居る程瀬木さんの足は遠くなるが、懊惱いと思ふ程鶴淵さんは頻繁来る。

『あゝあ、年を老つたお客でなければ駄目だね、此方で待たれるやうなお客は浮氣だから滅多に来る事ぢやアない!』

小勇姐さんはかう云つて零す。初手を云へば小勇姐さんが儂を聘んでくれたから始つた事でもあり、鶴淵さんを兵庫屋さんへ引張つて来たのは瀬木さんだから、三度に一度小勇姐さんを聘んでやるにしても、本尊様を擔ぎ出さないぢやア、什麼しても眞個の義理は立たないと思つたから、いつかも鶴淵さんの来た時に、

『稀にやア瀬木さんも連れて来て頂戴な、でないと小勇姐さんに儂が濟まなくなるわ!』

と云ふと、鶴淵さんは急に眞面目になつて、

『瀬木は當分遊ぶ事の出来ない身の上になつたんだ。詳しい事はいづれ小勇に話すが、お前から瀬木はもうそんな暢氣な身分ぢやアないと諦めさせてやるがい!』

「ぢやア瀬木さんは遠くへでも行つたんですか？」

「なアに東京には居るんだが、今度女房を貰つたから、當分引張出すも氣の毒だ、それに家を持つて見ると、今までのやうに遊びも出来なからうぢやないか」

「瀬木さんに新婦さんが出来たんですつて、まア、甚麼女だか見てやりたいわね！」

「それが俺も不思議に思つて居るが、小勇に生寫しと云ふ女だ、よくもまア似た顔があつたものと思ふ位だよ！」

「ぢやア何よ、小勇姐さんに似た新婦さんを探したんだわ、憎らしい、その位なら小勇姐さんを貰へばいいのに、瀬木さんも随分な方だわ！」

沁々姐さんが氣の毒になつて、瀬木さんが急に憎いやうな氣がして来る、鶴淵さんは笑ひ消して、

「さうさ、あの位なら小勇を貰へばいい、瀬木が小勇を貰へば、俺は直ぐに此妓を貰ふんだに！」

と云ひながら、儂の頬邊を鳥渡突いて、

「惜しい事をした！」

「あら、憎らしい、貴郎はお神さんがあるんぢやありませんか、其年になつてお神さんの無い人つてありやアしないわ！」

「無い、だからお前を貰つちまはうかと思つてるのだ、什麼だ俺の女房には、ちツと年が違い過ぎるかね！」

餘り眞面目だから、屹度先のお神さんが病死か何かして、それで淋

しいもんだから、かうして遊ぶのだらうと、釣込まれる、

「眞個に、貴郎も神さんはないの？」

「お神さんはないが、女房なら家に一人居る！」

其處にあつた煙管で肩のどこを食はしたが、先方は平氣なもので

「怎うだ、俺の内へ遊びに来ないか！」

「誰が！」

と大きく舌を出してべっかッ、こうをしてみせると、

「誰も居はしない、聾の姥さんが一人切だ、それに庭は廣し、景色

は好し、海水浴と云ふ時節ぢやアないが、貝位拾ふには以て來い

だ！」

「だつて……今……貴郎は女房が一人居るつて云つたぢやありません

んか、その聾のお姥さんてのが、お神さん？」

「莫迦を云へ、俺の女房はお前より年が若いかも知れない！」

「一體貴郎の家つて、何處なのよ？」

「逗子！」

逗子と云へば鎌倉の先きだ。そんなところから京橋の銀行へなんぞ、

毎日通つて行けるものか、顔に似合はない嘘をつく人だと思つた。

「嘘！ 嘘！ 貴郎の家は東京に在るんだわちやんと知てよ！」

「東京にもあるが、逗子にもある。東京の家には奥方様も居れば、

お前のやうなお嬢様も居る、書生も居れば下婢も居る、だから逗

子の方へなら、いつでも連れてつてやらうと云ふのさ！」

「ぢやア、別荘なの？ 連れてつて頂戴、今つからでもいゝわ！」

『この間約束の歌舞伎座は怎うするんだ！』

『それは後でもいゝわ、よ、連れてつて頂戴よ。小勇姐さんも誘ふ

わ、何日？ 鳥渡！ そんなに焦すもんぢやなくつてよ』

短兵急に押寄せてやつた。何もさうまで云はないでもいゝんだけれ

ど、小勇姐さんも平常そ云つて居る、お客様位嬉しがらせを云ふ

ものはないから、う、ッ、かり真には受けられない！ 歌舞伎座だつて

小田原に違ひない、歌舞伎座が小田原の位なら、せめて逗子でも真

物にして、遠出を附けて、藤公を驚かしてやらうと云ふ一念、鶴淵

さんは真逆そんな事とは御存知なし！

『姐さんを連れて行くのもいゝが、お前一人は来られないかね、往

きにも俺が連れて行くし、歸りにも俺が此處まで送つて来てやる

が！』

一人では大姐さんが第一不承知を云ふに違ひない、けれども考へて
見ると初めての遠出だから、獨りで行つて家中の者を驚かしてやり
たくもなる。

『貰つて、そりやア家で承知しないわ。けれども此處の家のお女將

さんさへ承知して、大姐さんに頼んで貰へば行けない事もない、

けれど……』

『ちや、ま、何方にしろ、十九日の土曜日の夕方から、日曜の晩ま

でと云ふ事にしやう俺が此處まで迎へに来る！』

『嬉しいわ、けども貴郎から女將さんに今の事を頼んで頂戴！ 小

勇姐さんを誘つて、もしか差支でもあると、儂行かれなくなりま

すもの！」

「歸りにでも頼んで見やうよ」

「今よ、今よ、今頼んで頂戴！」

と手を拍くと、鶴淵さんは仰向けにごろりと臥ながら

「いや、氣の早いお姫様だ！」

何でも事は早いに限ると云ふ事を此人は知らないと思える！

七

大姐さんも捌けた人さ、遠出の御祝儀さへ頂けばと云ふ挨拶。何

だか知らないが兵庫屋の女将さんに幾度もお禮を云つて居た。「鶴

ちゃんがね〜」と云ふ言葉が箝まるのを見ると矢張儂の事に相違な

い、何がそんなに難有いのか知らと思つた。一人で行きたいは山々

だが、小勇姐さんも一遍は誘つて見なければ義理が悪い。もしか行かうと云へば一緒に連れてつてやる分の事、かうなると儂も豪くなつたやうな氣がする。上飛車から、

「姐さん、鶴淵さんが逗子の別荘へ來いつて、儂、もう大姐さんも

承知して、行くことになつたけれど、姐さん、一緒に行かなくつ

て？」

第一姐さんは此間ツから御機嫌が悪い、鶴淵さんばかり来て、瀬木さんは顔を見せない。その上、義理でたつた一度姐さんを聘んだツきり、鶴淵さんはいくら強請つても、姐さんを聘んでくれない。姐さんは儂を義理知らずと思つて居るのだらう、何でも謎で固まつて居る家業だから、其謎がまた妙に搦まつて解かれる事などは稀ら

しくない。姐さんも屹度さうだ、儂が瀬木さんを堰いてども居るやうに思つてるのだらう。あれから此方ちよい／＼訝しな事を儂に云ふ。やれ鶴淵さんは勝手な人だとか、鶴ちゃんも頭字が同じだけに矢張能く似て居るとか、碌な事は云はない。それと知つて居る儂は多分誘つても行く氣遣はないと思つて居た。

「ねえ、姐さん、一緒に行つて見やうぢやありませんか！」
思つた通りだ。姐さんはぢろりと儂の顔を見て、

「鶴ちゃんは……お楽しみね！」

「儂一人ぢやア心細いわ、姐さん一緒に行つて頂戴な、ね、いゝでせう？」

どおツ冠ぶせると、姐さんは懊惱いと云はないばかり、

「難有いけれども丁度十九日の日は外にお約束があるから……鶴淵さんにも宜敷く云つて頂戴！ その代りお土産を買つて来て貰はないぢやア……儂が一番益らない役廻りなんだからさ」
「そりやア買つて来ますわよ、馬へ積んで歸つて来るわ！」
「お前さんの云ふ事なら、鶴淵さんは何でも聞くわよ！」
突然に後ろから藤公が口を出す。

「鶴ちゃん、儂を連れてつておくれでないか」
餘計な奴に聞かれてしまつた。只の一度だつて義理に聘けてくれた事もない癖に、連れてつてくれなんて、何の口で云はれるのかと、呆れて後ろを振り返ると、
「儂なら、何よ、家中皆誘つちまうわ！」

何と云ふ憎らしい奴だらう、だからお茶屋さんでも藤公の事をあちや、びいといと云つて居る、誰がそんなちや、びい、なんぞ誘ふもんか。

『藤ちゃんなんぞ誘つたら、それこそ何處かの人に叱られるわ、ねえ、姐さん』

小勇姐さんも未だ藤公よりも儂の方を最負にして居ると見える、

『お客様が鶴ちゃん一人つて云ふのを、他の者が行つちやア悪いわ！』

姐さんだけにうまい事を云つてくれたと思つた。藤公もぎや、ふんど参つて、戶外の方へ出て行つてしまつた。愈々獨舞臺！十九日が待遠しい。

種々な事を考へて、種々な面白い夢を見て三晩と云ふもの思ひつゝけた。其日も一日をわくゝと暮してしまつて、三時過ぎから仕度を始めた。大姐さんの云ふには、『何しろ、さう云ふお伴ならば素人らしい扮装の方がよからう』と云ふので、其通りにする。帯もお太鼓に結べば、褌もさちんと合せて、お嬢さんらしく拵へる。何だか野暮ツたいやうな氣もするけれど、さばくしていい。兵庫屋さんから迎ひも来るだらうと、幾度戶外へ出て見たが譯らないが、四時を打つても来ない、五時が打つ、矢張来ない。志乃姉さんは嫉妬半分こんな事を云つて冷かす。

『鶴ちゃん、お前さん、お客様に擔がれたんだよ、まア、御苦勞さま！』

あれ程堅いお約束だもの、来ないつて法はない、若し嘘だつたら什麼しやう、それこそ藤公が何と云つて愚弄ふか譯つたものぢやアない。態を見ろと云ふだらう、振けて居ると嗤ふだらう。それが何よりか一番口惜しい、苦しませられに清正公様を拜んだ、真から神様を拜んだのはこれが始めて。御利益は争はれないものと思つた。間もなく兵庫屋の女将さんが迎ひに来てくれて、大姉さんに一言二言話をしたかと思ふと。

『ぢや、ま、女将さんが保証して下されば間違はないでせうから……』

大姉さんの返事がこれだ。儂はまごろつくつて仕方がない、早く話を切上げればいゝと思ふのに、女将さんは以細關はず饒舌つて

居る、氣の利かない人だ。漸う神輿が上つて家の敷居を跨いだかと思ふと、花本さんの女中衆と立話。焦れツたくつて遣切れたものぢやアない、急ぎ立て、兵庫屋さんのお帳場へ来て見ると、外套を着たまんま鶴淵さんがらよこなんと俟つて居る。

『お待遠様でしたわね、ま、お二階でお茶でも一つ召上つて被入いませんか!』

女将さんは悠々と火鉢の向ふへ坐る。

『お前一人かえ、大分老けた拵へだな』

と鶴淵さんは儂の扮装を透々見て、
『かうなると眞面目過ぎて不可ない、矢張何日の方がいゝな!』
酷く御意に召さないど云ふ形ち、女将さんは香煎へ白湯を注しながら

ら。

「矢張この方が好ござんすわ、餘り雛妓らしいのもけばくして、遠出にやア感心しませんね！」

鶴淵さんは時計を見て、

「丁度い、女將俵を二臺吩咐けて貰はうぢやないか！」

「新橋へでございませう……お花や！」

ど大きく呼んで「へい」と厠から微かに返事が聞えるど、

「急いで、お前さん、大龜さんへ行つて二臺を云つて来ておくれでないか、大急ぎ！」

お花さんは厠から出ると、手も洗はず急いで駈出す。

「今つからですど、随分遅く着くでございませうね、鶴ちゃんは明

日の今頃までと云ふお約束にして参りましたから……」

それまでには歸してくれど云ふ謎だ。御念の入つたものさ、駈落ちやあるまいし、いつか一度は歸つて来る、さう現金な事を云はないでもよかりさうなものだ。俵が二臺共揃つて来た。一人は見知越の新さん、威勢のいゝ人さ、平素なら何か冷かさずには居ないのだからが、お客様と一緒だから、妙に堅くなつて、儂の顔を見ると、いやいと可厭に笑つたものさ、儂は故爲ともう一人の方のへ乗る。

「行つてらッしやいまし、御機嫌能う！」

「鶴ちゃん、お土産を忘れるど承知しないよ」

こんな氣持のいゝ事は今日が始めてだ。挽き出すと飛ぶやうに駈ける、あの麥酒樽のやうな鶴淵さんを載せて、能くかう駈けられるも

のだ、嘸新どんが重いだらうと、妙な事を考へて居る中に新橋。不相變一杯の人だ。皆逗子へ行く人か知らと思つた。

『鳥渡こゝに待つといで、切符を買つて来るから！』

一、二等室の長椅子に腰をかけて待つて居るとやがての事鶴淵さんは切符を買つて歸つて來た。白いのが二枚、奮發んだものだ。がらん、がらんが鳴つてプラットホームへ出る。三等も二等も芋を揉むやうな人だ。そこへ行くど一等は西洋人と日本人が五六人しか居ない、氣樂なものさ。腰かけだつてふわりとして、お茶屋さんの座布團なんぞ側へも寄れはしない、ピリ、ピリと云ふ合圖で動き出す、これは二等だつて、三等だつて異りはないだらう、三等なんぞ少し位置いけて堀にしてやるぞいと思つた。折角一等へ乗つて同じやうに動

くんぢやア益りやアしない！

品川でまた乗つた。有繫の一等も隙間がなくなつてしまつた。

『こんなに乗つたら、汽車屋さんも儲るでせうね！』

と云つたら、鶴淵さんは可厭相な顔をして横を向いてしまつた。大體汽車へ乗つてからの鶴淵さんは宛然違つた人のやうだ、憎らしい程濟して居る。

『や、鶴淵さん、久振でしたな！』

向ふの隅に居た三十格好の洋服が、儂の隣席へ遮二無二割込んで來る、窮屈で堪つたものぢやアない。鶴淵さんは吃驚したやうに、洋服の顔を見ると、

『おう、馬島君か、久濶逢はん、依然として例の會社かな？』

『さうです、不相變やつて居ります、いや、伺はうくと存じては居るのですが、多忙なものですから、つひく御無沙汰にのみなりまして……』

濟みませんと何故云はないのだらう、其位知つてれば御不沙汰をしなればいゝに、此人も横着な人らしいと、昵と顔を見てやつた。

『大層遅く……御別荘ですか、いやそれはく！』

碌圖法返事も待たないで、獨りで咽込んでかゝる、恐ろしい氣の早い人とも思つた。

『君はまた何處へ行くのかね、一騎がけの遊山と云ふ譯ではあるまゝが！』

『いえ、什麼致しまして、社用で國府津まで参りますんで、明朝の

一番で歸らねばなりません』

『それは忙しい、ちと暇があつたら、別荘の方へやつて来るさ！』

『難有うございます……然し』

と洋服は儂の顔を讀むやうに、

『失禮な事を伺ふやうですが、これがその一番上のお嬢様で被入いしましたかな？』

鶴淵さんはぎやふんさね、『さうだ』とも云へないだらうし、さうかと云つてあかの他人とは尙云へない、何と云ふだらうと待つてゐると、

『お察し……の……と……を……り……ぢや！』

可厭に其間が延びて居る。洋服は急にまた餡麵麩のやうな顔を、儂

の願の下へ持つて來ながら、

『あ、もうこんなにおみ大きくおなりですか、確かお十四で被入
 いましたな、へい、實にお美しくい、失禮ながら素人のお嬢様の
 やうではございません、ではもう學校も御卒業で、いづれ音楽な
 どのお嗜みもおありでございませう』

幫間と賣卜者とを兼ねたやうな奴だ。べら／＼立續けに饒舌つて居
 る。音楽と云ふのは三味線の事だらう、その嗜みがなくつて一本に
 なれるものか、

『こゝは何處なんでせう？』

鶴淵さんに訊かうとすれば洋服は横から引奪つて、

『神奈川です、もう横濱は直さでございますよ！』

成程神奈川に汽車がとまる、お腹が減いてしやうがない、其筈晩の
 御飯を三時に食べちまつたのなもの、何か荐りと食べたくなる。鶴
 淵さんの袖を引張つて、汽車賣を呼んでお饅頭を十個買つて貰つ
 た。『お上んなさい』とも云はずに、獨りでべらりと平げて、

『また此次の停車場へ着いたら蜜柑を買つて頂戴！』

と云つたら、洋服は呆れた顔をして儂の様子を眺めて居た。恐ろし
 い大食のお嬢様だと思つたらう。鶴淵さんも鶴淵さんだ、何とかや
 さしい言葉でもかけてくれる事か、苦り切つて、窓の外ばかり見て
 居るのなもの、面白くも可笑しくもない。

大船で乗かへ！ 好い鹽梅に洋服と別れる事が出来た。お辯茶羅
 な奴だ。あんな奴は屹度お茶屋さんへ來てもお履物にされる柄だら

うと思つた。すると鶴淵さんも、洋服が嫌ひと見えて急に元氣づく。

『お前、汽車の中だけは少し遠慮しなくツちやア不可ないぜ！』
何の事はない阿父さんに小言を食つて居ると云ふ風だ。

『何故、不可なくつて？』
と聞くと、鶴淵さんは苦笑をしながら、

『一等へ乗るお嬢様で、饅頭を十個もべろりごやれば、大體の人は
吃驚する、あの男も驚いて居たに違ひない！』

汽車へ乗るお稽古も随分と六ヶ敷いものだ。

逗子の停車場へ着くと、人車がもう出拂つてしまつて居たと云ふので、がた馬車へ乗る事になつた。汽車の一等から急にがた馬車

だ。華族様から乞食に零落れたやうなものだ。

別荘と云ふのは淋しい町端を、また一町ばかり横へ入つたところだ。轟々と云ふ音が聞える。

『何でせう、彼の音は、氣味が悪いわね』

と云ふと、鶴淵さんは濟したもので、

『あれが海の音だ』と云ふ。

成程恐ろしい音だ。お芝居のとは少し譯が違ふやうだ。門を入ると砂で埋りさうになる。不意打と見えて、蟬のお姥さんときまぎして居る。暗い所に立つて居る儂を見ると、

『お嬢様、まアそんなところに立つてらッしやらずに、此方へお這入り遊ばせ！』

これも痴違ひをして居る、すると鶴淵さんは儂の顔を見て嗤ひながら、

「家の嬢ではない、嬢のお友達だ、婆やはまだ始めてだらう！」
 關ふ事はないから、かゝく入つてやると、婆さんは穴の明く程儂の顔を見る。

「オアお美しい、何處の嬢様でございます、矢張御同役様のお嬢様で……これはく被入いまし！」
 べたくと疊まるやうに辭義をして、

「旦那様が被入らうとは存じませんでした、殊によつたら、明日は奥様がお出でにならうとは存じしたので……奥はそれでも綺麗なお掃除が出来て居ります、只今洋燈を點けますから……」

と獨りで饒舌つてそはくと沈着かない婆さんだ。

「さア、奥へお出で遊ばせ！」

婆さんは洋燈を持って先さへ立つ。襦を開けて入つて見ると、餘り綺麗ぢやない、疊たつて古ぼけて居る、何だか陰氣臭くつて、可厭な室だ。

「御夕飯は未だでございます、生憎とお肴は不漁でございますしてね！」

と婆さんがまた出て来る。

「飯もさうだが、明日家内が來ると云ふやうな事を手紙でもよこしたのかな？」

鶴淵さんの聲は吃驚する程大きかつたけれど、婆さんの返事は頓珍

漢だ。

『明日もいゝ按配にお天氣様でございませうよ』
成程豊だと思つた。

『さうぢやない、明日家内が来る事になつて居るのかと訊く事
や！』

「左様でございませうね、此二三日は滅切とお寒くなりまして、炬燵
が欲しくなつて参りました」

矢張頓珍漢の返事をして臺所の方へ行つてしまふ。手持不沙汰で居
る中に、成程炬燵が欲しい位だ。豊でも寒いのは譯ると見える。小
鱈の煮つけと鶏卵のお吸物で御膳を食べる。何だか淋しくつて、東
京が戀しくなる。

『什麼だ、別荘は淋しい位静かだらう！』

『儂、何だか心細くなつてよ、東京へ歸りたいわ！』

と云ふと、鶴淵さんは仰向けに引ツくらかへつて、笑ひながら、

『今漸と来たばかりで、そんな心細い事を云つては困る、明日の朝
は海へ行つて見るさ』こんな事を云つて居る中に九時が打つと、

婆さんまた遣つて来て、

『お疲勞でございませう……このお嬢様のお床は何方へ延べますで
ございませう？』

『此處でいゝ！』

と鶴淵さんが疊を叩いて吩咐ると、怪訝な顔をして婆さん引下つた
が、やがて縁側へ地響きをさせながら夜着を運び込む。氣の利かな

い婆さんだ、北枕に敷いて、

『お慰みなさいまし！』

さっ／＼と行つてしまふ、心細い事此上なし。鶴淵さんの鞆の中か
ら着換へを出してお先へ御免を蒙つてしまつた。鶴淵さんとはど見
ると、床の上へ胡坐をかいたまゝ、荐りと何か考へ込んで居る。

『何處か痛いんぢやなくつて？』

と訊くと、ひよいと此方を見て、

『なアに、何ともありやアしない！』

『そんならいゝけれども、若しかお腹でも痛いんぢやアないかと思
つて』

『若し痛くなつたら、お前は什麼する』

『心配だわね！』

『さうか』とまた鬱ぐ。

『いや、儂、鬱いぢやア、淋しくつて仕方がないわ！』

『ぢや、騒がう、お前も起きてお騒ぎ、お騒ぎ』

突如立上つたと思ふと、儂の手を引張つて、無理に起さうとするの
だ。

『待つて頂戴よ、起きるから、痛くつてよ、さう無闇に引張つたつ
て、起られやしないわ』

するりと器用に夜着を脱けたが、さちんど座り直して、はだけた襟
を掻合せる暇もない。鶴淵さんは飛かゝつて、儂を押へつけてぎユ
う／＼の目に合はせる。悪くしたら殺しもし兼ねない按配、儂は物

恐ろしくなつて来た。

「鶴淵さん、貴郎什麼する積りなの？」

恨めしさうにかう云つて、

「儂、そんな酷い目に遭すんなら、これから歸つてよ！」

と脅喝してやると、抱へて居る手を離して、

「餘り淋しいと云ふから、騒がうと思へば直きにそれだ。什麼するもんか、さア寝ろ〜！」

狐に魅まれて居るやうなものだ。あんな莫迦な真似をして嬉しがるのが好きのだらう、變た唐變木だ。今度愚弄つたら甚麼眼に遭ふかも知れないと思つたから、黙つてまた床の中へもぐり込んで狸寝入を極める。

浪が轟々と鳴る音と、氣味が悪いのどでまんぢりともせず明かしてしまつた。別荘なんて二度と來るところぢやないと思つた。朝の御飯を濟すと鶴淵さんが海へ案内してくれた。大きな浪が岩へ衝突つては跳返して居るばかり別段珍らしいとも思はない、汐汲の踊に使用浪幕の方が氣が利いて居る、可厭だと思ふと何を見ても可厭になる、鶴淵さんは獨りで嬉しがつて海ばかり見惚れて居る、身でも投げ積りぢやあるまいかと思つた。

「阿父様、まアこゝに被入つて、甚麼に探したでせう！」

不意と後ろから聲を懸けたものがあるから振り向いて見ると、儂と同じ年位の下ゲ髪が、不思議さうに儂を見ながら立つて居る、驚いたのは鶴淵さんだ。突如引返して、

「おう、嬢か、いつ来たんだ？」

「今し方阿母様と来ましたけれど、阿父様がお居でになるつて云ひましたから……儂随分探したわ」

鶴淵さんのやうに麥酒樽でもないが、お嬢さんも随分と能く肥つたものだ。友禪の二枚衾に帯は厚板を立矢の字、空氣草履をはいたところは立派だが、白粉が斑について、額から襟へかけて縁取りになつて居るところは、有繫野暮な扮装だと思ふ。

「此方は何處の方なの？」

可厭に「方」づくめだ。鶴淵さんはごきまぎしながら、

「これか……これはお前は知るまいがの……此先きの別荘に来て被入るお嬢様だ！」

あゝ見えて中々嘘の名人だと思つた。

「昨夜別荘へお泊りになつたんですつてね！」

鶴淵さんも二の句が次がない。

「家へ被入つての、餘り長く遊び過ぎたもんだから……」

「ま、さう？」

と云つてお嬢さん儂の顔を見て、

「今日はよござんすわ、阿母様と儂が居るから晩に被入いよ、そしてピンポンでもして遊びませう、ね、屹度、儂お友達がなくつて淋しいんですもの！」

馴々しいものだ。何日なら負けちやア居ないのだけれど、今日は何だか氣が射して、什麼返事をしたらばと途惑つて居る中に、先きは

もう友達の了簡で居るらしい。

「貴嬢、餘程長く此方へ来て被入つて？」

「いゝえ……」

と半分は咽み込んでしまふ。

「今阿母様が屹度こゝへ被入るわ！」

さア大變！ 來られたら何と云つて挨拶をしたものだらう。まさか雛妓でございとは云へない、困つたものだ。鶴淵さんが昨夜爵いで居たのも、屹度これが心配になつたのだらう！ 逢ふのも可厭だけれど、甚麼お神さんだか顔を一つ拜んでやりたい。鶴淵さんのお神さんなら屹度野暮に違ひなからう、儂を見たつて、別に不思議とも思はないに極つて居る、よろしく嘲弄かして遊んでやれど度胸を

据へる。

「そら、阿母様が被入つた！」

云ふ中にもう其處だ。恐ろしくひよる長い、淋しい容貌の、而も何處かに險があつて、いけ好かない人柄だ。

「あや、所天、昨夜は銀行の御用で静岡へ被入るつて、別荘なら別荘と被仰つて被入ればいゝ事を、姥だつて、不意打は驚きまさアね！」

云ひながら、儂を見ると、

「此方は？」 頷でしやくる。

「何さ……此先きの別荘のお嬢様さ！」
鶴淵さんは「この先きの別荘」で押通して居る。

『へえ？』

と惚氣た返事をして、

『お前さん、何處から来たのさ？』

恐ろしく粗末な口を利く人だ。若しか別荘のお嬢様としたら甚麼に腹を立つだらう、返事もしないで居てやると、

『東京から旦那様と一緒に御出でなんだらう、よくまあさうやつて、儂に顔が合はせるね』

愈々事だ！ これだから御亭主に浮氣をされる筈だ。何も儂だつて

鶴淵さんが来いと云ふから来たまで、お神様から不足を云はれる

因縁はない、あれば此方から云つてやりたい位だ。素人なんぞに脅

泊されて堪るものかと思つたから、

ありませんか！』

『鶴淵さんが来いッて被仰つたから来たんですわ、文句はないぢや、かうなりやア痰呵をきつて、反對に泡を吹かせてやらないぢやア、第一阿父さんの恥だと思つた。』

『まあ、お前は黙つてるが好い……成程これは昨夜俺が東京から連れて来た雛妓に違ひない……けれごもだ連れて来た俺は悪いとして、何も此妓に當る事もなからうぢやないか！』

鶴淵さんはどう、兜を脱ぐ。お神さんの尻に始終敷かれつけて居ると見えて、意氣地やアない、はら、はら、して居る。

『所天も所天ですわね、何程お忙しいからつて、儂と嬢が此處へ来る事は二週間も前に御承知の筈ぢやございませんか。所天が昨夜』

被入るんなら、儂は兎も角、何故嬢をお連にならなさいのです。こんな、所天、何處の馬の骨だか知れない者を連れて来て！」

失禮な事を云ふお神さんだ。馬の骨とは誰に向つて云ふ言葉か知らないが、儂ならちやんと阿父様もあれば阿母さんもある、阿父様は而も消防小頭で幅の利いたものだ。馬の骨に阿父様はない筈だ。志乃姉姐さんや藤公に随分酷い事を云はれるが、今日位腹の立つた事はまア悲しい、考へると哀しくなつて、泣かない積りでは居るけれど、眼から自然涙が出る、

「鶴淵さん、儂……もう歸つてよ！」

眞個に儂は歸る積りだ、何處を的ともなく歩行出すと、

「ねえ、阿母様、雛妓なんて汚らはしいわ、歸つちまう方がよくつ

てね！」

立矢の字までがこんな事を云つて居る、追ひ絶つて來た鶴淵さんの慰諭めるのさへ懊惱くつて、歸る事にしてしまつた。

着替一枚を風呂敷に包んで抱へながら、がた馬車へ乗つた時には、いつそ鐵道往生でもして、鶴淵さんのところへ化けて出てやらうかとも思つた。さう云へば逗子は家から裏鬼門に當つて居る、悪い筈だ！

二等へ乗つて歸るだけのものは鶴淵さんがくれたけれど、口惜しいから三等へ乗つてやつた。この方が窮屈でなくつていい、隣席に居たお爺さん、鶴淵さん流義と見えて、蜜柑や何かをくれて荐りと種々な事を云ふ、東京へ奉公に出るのかなんて、失禮千萬な事まで

訊く。

大船で下りを待合せる、随分と長かつた。漸く摺違つてびたりと停つた汽車の窓。瀬木さんが頸を突出して居る傍に、赤い手柄の丸鬚！横顔が小勇姐さんに髣髴だ、新婚旅行とでも云ふのだらう、小勇姐さんが若しか儂と一緒にだつたら屹度癩を起したに違ひない。

『まア瀬木さん！』

と云ふ中に此方の汽車は出てしまつた。男程女を翫弄にする、薄情な、そして平氣な、野法圖なものはあるまいと滲々思つた

九

兵庫屋さんへ行くのも體裁が悪かつたから直ぐに新橋から俣で家へ歸つて來た。好い鹽梅に志乃姉姐さんも誰も居ない、金比羅様へ

お詣りに行つたと見える、小勇姐さんがぼつねんと留守番をして居たから、突然顔を見るとかう云つた。

『姐さん、若しか電車の中に狂人が居て、雑沓の中で及物を振廻したら什麼なると思つて、儂は姐さんと兩人で其狂人の氣にならうと思ふの、そして、賣出して、日本一の藝者になつたら、鶴淵さんや瀬木さんが嘸吃驚するでせうね！』

いくら姐さんでも、此謎は解けないだらう、解けたとしたら姐さんは什麼思つたらう、これも矢張謎の中だ！

お酌日記終

駢

落

— 序幕ともいふべきところを

端書を合圖に駢落の幕切れ

(場所は何新道とでもいふ狭い路次▲時は午前十時前後▲お君年頃漸と二十一二にもならうかといふ小柄な娘色の淺黒い眼元のかんだ何處となく仇つぼい風俗七寶紋の鳴海の浴衣へ縞博多と黒縹子の晝夜帯をひっかけにして居る▲男は年の頃二十二三無垢の江戸肌で左の字崩の中形の單衣に段々染の三尺を前結びにして居る名を野々村久二郎といふ遊人表面上車夫をして居る人物お君に呼とめられて振向いた見得)

(君) ぢやアね、久さん、都合次第で端書を出すやうなことにするからね、いゝかえ、屹度来てたくれよ、屹度だよ、間違ふと

酷いよ、いゝかえ。

(久) 來るともよ、其方の都合さへ好けりやア、何日でもだ。

(君) 體のいゝことをいつて、また品川へ流連みの、忘れちまひは御免だよ。

(久) 駢落前だといふのに品川でもあるめえぢやねえか、だが、駢落といふやつもよ、演劇でするやうな解には行くめえな。
(君) 演劇といつてもさ、駢落をする、直ぐに追手と來ちやア下さらないわね。

(久) アハ、、、、、、それもさうかえ、何しろ端書を合圖に慕としやう。

(君) ぢやア、屹度だよ、二三日中!

(久) 心得て候だ。

(と久二郎は妙な身振をしながら行つてしまふお君は見送つて恍惚となる。此處へ此以前與太といふ痴愚裾短かな棒編の單衣に綿博多の帯を巻帯にして古き裏皮のはがれた雪駄を穿きのつそりとお君の後へ立つお君は振返つて驚く科介。

(君) 與太さん、お前、何時の間に此處へお出でだ)

(與) 何時の間につて、先刻から此處に居るんさ、だが、お君さん今お前そいつたね、それ、駈、駈落つて、一體何の事をいふんだえ？

(君) 駈落つてのかえ、駈落つてのはね、あの、何さ、男と女が一所に歩行く事を駈落といふのさね。

(與) さうか、男と女が一所に歩行くのを駈落と云ふのかえ。

(與太は拱手をして頻りと何か考へ込む)

(與) さうく、さういへばね、お君さん、芝のね、増上寺だのね、淺草の仲店へ行くとね、その何だ、駈落が澤山あるぜ。

(君) 馬鹿をいひでない、そんなに駈落があつて堪るものかね。

(與) お君さんは知らねえんだ、二重外套、ね、あれを着た男がね、丸鬚に結つた女の手を曳いて、駈落をしながら紅梅焼を買つてたぜ。

(君) オホ、、、お前、美ましくはなかつたかね？

(與) 美ましくつてよ、だが、お君さん、お前、何かえ、今のやつと駈落をするのかえ？

(君) 誰があんなやつと駈落なんぞするものかね。

(與) 眞個かね、え、屹度駈落はしないんだね。

(君) しないつてば、する位ならお前とするわ。

(與太は嬉しき科介)

(與) 虚言だらう、己と駈落をして歩行く、虚言だアお君さん、虚言に極つてらア。

(君) 虚言ぢやアないよ、眞個にお前とならば何處へでも行つて見たいわ、だがね、與太さん、お前先刻からの話を皆聞いたんだね。

(與) 聞いたよ、皆聞いた。

(君) さう、聞いたらば聞いたでいゝがね、お前、お願だから妾の

亭主になつておくれでないか。

(與太は益々喜ぶ)

(與) お前の亭主、己がお前の亭主になるとすると、お前は己の女房だね、馬鹿いつちやアいけねい、お前また己を欺かして笑はうなんて、其手は喰はねいや。

(君) 眞個にさ、お前、可厭だらうね、妾ぢやア。

(與) 可厭ぢやアねえよ、己が亭主になれば可愛がつてやるけれどな……………。

(君) 眞個かえ、嬉しいね、ま、外ぢやア話も出来ないから、さ家内へ這入らうぢやないかね。

(與) いゝかえ、這入ても、何だか氣味が悪いな。

(君) 妾の家だよ、さつさとお這入といへば、お前の女房の家なんだよ。

(與) ぢやア這入るぜ、いゝか徐々這入込むことにするからね。

(お君與太内へ這入る)

(君) そんなにおいゝ、おしでないよ、お前が妾の亭主になつておれなら、妾の家はお前の家だもの、威張つてる方が亭主らしくつていゝぢやアないか。

(與) だけれどもね、お君さん、此處の家はお前の養父さんのおぢやないかね、金さんのね、金さんの家として見ると、餘り幅がきかねえんだ。

(君) 妾の家だつたら、解らないね、養父さんのおぢやないから、安

心して胡座でも何でもかくがいゝわね。

(與) さうかね、眞個に金さんのおぢやアないんだね、ぢやア眞平御免を蒙るか。

(と與太は胡座を極めて見てまた座り直す)

(君) 巧者なことをおいひでないよ、御免蒙るなんて。

(與) ぢやアいはねいよ、お君さんがいふなつていへば、もう屹度いはねいよ、伊勢屋の隠居にもいはねいやうによくそいつてやらう。

(君) そんなことは什麼でもいゝがね、與太さん、眞個にお前は…妾のやうなものでも女房にもつておくれかえ。

(與) お前の方さへよけりやア己ア女房になるともよ。

(君) お前まへが女房にようぼうになつて堪たまるものかね。妾わたしがお前まへの女房にようぼうになるといふんだはね。

(與) そりやアお前まへ、何方どこでもいゝぢやアねいか。

(君) 眞個ほんごだよ、屹度きつご女房にようぼうにするんだよ、え、屹度きつごだらうね、女をんなつてもものは、欺だまかされ易やすいものだからね。

(與) そりやア、何なによ、お前まへが己おれの女房にようぼうになつてくれりやア己おらもう死しんでもいゝんだ。眞個ほんごだぜ、お君きみさん、己おらね、お君きみさん、疾さうからお前まへに惚ほれ……惚ほれてね、え、虚言うそぢやアねえよ。

(君) (と與太よたは恥はづかしさうに俯向うつむいてしまふ)

(君) 屹度きつご！ 屹度きつご！ 屹度きつごなつておくれだね。ぢやアお前まへは妾わたしの

爲ためになら甚さん麼事なでもしておくれだらうね。

(與) そ、そりやアお前まへ亭主ていしゆだもの、お前まへの爲ためとなりやア甚さん麼事なでもしなくツてよ。

(君) 今いまの事ことをお前まへ悉すつかり皆聞きいたんだね。

(與) 駈落かけおちの一件いっけんだらう、聞きいたども。

(君) 聞いたのはいゝがね、それを饒舌しゃべらないやうにしておくれでないか、一生しやうのお願ねがひだからね、饒舌しゃべつてさへおくれでなきやアいゝんだから……。

(與) 饒舌しゃべりやアしねえよ、だがお前まへの養父おやさんに位ぐらゐ云いつたつていゝぢやアねえか。

(君) あれ、其養父そのおやさんに饒舌しゃべつちやアいけないんだつたら、誰だれに

も饒舌つこなしなんだよ。

(與) ぢやア誰にも饒舌らねえ、金さんにも隠してらア。

(君) 頼もしいよ、眞個に、だから女が惚れるんだよ。

(與) 申戯云つちやアいけねい、だがな。お君さん、お前見たやうな
いゝ女はありやアしねえね、己がお前の亭主になればお前の
養父さんのやうに水を汲ませたり、使にやつたりなにかしや
アしねえ。家へ連れてつて、土藏の中へ入れて、大切に仕舞
つて、時々顔を見て、甘味えものを食はせて、いゝ衣服を着
せてよ、芝だの淺草だの駄落をして歩行んだぜ。

(君) ホ、いゝ、いゝ、さうしてくれりやア、眞個に仕合せ！

(與太は昵どお君の顔を瞻めては涎を拭く)

(與) お前……お君さんは幾歳になるつけか？

(君) 十八！

(與) 虚言をついちやアいけねえや、十八ぢやアあるめえ？

(君) 虚言なんぞつくものかね、眞個に十八さ。

(與) 十八にしちやア老けてるな、お前が眞個に十八だと、己が二
十一だから、さうよな、十八、十九、二十、二十一、と四つ
違ふんだね、丁度いゝや。

(君) さうだね、四つ違ふんだね。

(此時路次口を養父金藏何か首領さながら這入つて来る▲お君
は登音を聞きつけて驚く科介仰向けにごろりと寝て。故意と
髪を捌いて帯を緩める。)

(君) さ、與太さん、關はず妾の胸倉を把つてこづいておくれ、早くさ、與太さん、踏跨つても、什麼でもいゝから、早くさ、胸倉をさ。

(與) 什麼するんだえ、お君さん、什麼すればいゝんだよ、痛かアないかね、こづいたら痛いぜ、えお君さん。

(與太は迂路くして手をつけ兼ねる態)

(君) 痛くつてもいゝよ、關はずこづいておくれ、よッ、あるつたけの力を入れてさ。

(與) かうか、お君さん、痛さうだな、もういゝぢやアねえか。

(君) 未だいゝよ、もつとこづいて、頭の毛を持つて曳摺廻しておくれつてば。

(與) そんなことは出来ねえよ、もうよささうぢやねえかな、

(君) お前、先刻の事を忘れたかえ、妾の爲なら甚麼事でもするつていつたぢやないか。

(與) 怒らなくつてもいゝやな、ぢやア曳摺るよ、いゝかえ、痛いぜ、ぢやア、曳摺るぜ!

(與太は途方に暮れて荐りにお君の胸倉をこづいて居る▲養父金藏格子を一寸開けて見て再び閉める『ハテ怪しや』どでもいふ態)

二

濡の幕どもいふべきところを
飛んだ三枚目の敵役

(君) 養父さんかね、早く上つておくれ、今什麼しやうかと思つて

る所なんだよ、人殺し！ 人殺し！

(金藏は周章て、下駄を脱いで懷中へ押込みながら格子を開けると突然中へ飛込む)

(金) さ、此野郎、他人の娘を捕めえて、什麼しやうといふんだ

え、眞晝間圖太い野郎ぢやねいか、うぬッ！ うぬッ！ う

ぬッ！

(金藏は與太の手を捻上げて三ツ四ツ擲着はせる)

(金) 馬鹿の癖にしやアがつて、さア、何の用があつて来たかそれ

をいへ、女一人の處へ來やアがつて、うぬッ、さア、什麼し

てこんな眞似をした。

(與) 什麼してつて、お君さんが這入つてもいゝつたから、這入つ

たんだ、お前の……金さんの家でもねえのに餘り幅がきゝ過
ぎらア。

(此時俯伏になつて居るお君は首を擧げる)

(君) 誰が……何時妾がそんなことをいつたえ、勝手に這入つて來

やアがつて、人を……妾を捕へて、口説いて、聽かないつて

……

(金) 太え畜生だ……さア派出所へ失せろ、馬鹿でも承知は出來ね

えんだ。

(與) ぢやアねえよ、お君さんが這入つていつたんだよ、お君さん

が、あの、こづいてくれつて頼んだからだアな。

(金) 馬鹿なことをいへ、誰が痛い目を見てこづいてくれつて頼む

奴があるかえ。馬鹿は馬鹿だけの辯解をしたからつて、尋常の人間は承知をしねえぞ。さ、失せろ、愚圖くぬかしやアがるど、其儘で置かねえぞ。

(與) 其儘で置かねえつて、金さん、お前、己を什麼するつていふんだえ。

(金) 什麼する。什麼するも如斯するもよ、うぬッ、其、何だ……土性骨を打挫くんだ。

(與) 嫌だよ、骨を挫くのは可厭だよ、お君さん、おい、お君さんお前、先刻己に頼んだぢやアねえか。

(君) 勘違をしやがつて、お前なんぞにこづいてくれつて何時頼んだよ、養父さん、早く其馬鹿を突出しちまつておくれよ。

(金) さア、柔順しく出る、太え莫迦ぢやねえか、さア、晝齋めッ、出るといつたら出ねえか。

(與) 出るよ、出るなどいつても出ない、金さんは無理なんだ。(與太はおづ／＼立上つて上り框の處へ来て何かまた荐りに迂路つく▲金藏はづいと立つて其方を見込む)

(金) うぬ、未だ愚圖くしてやがる、さッさと出ねえか。

(與) 急ぎなさんな、今、あの、雪駄を探してるんぢやねえか。(金) 雪駄だ、間抜け、其處にあらア、さつさと穿け。

(與) もう穿いちやつたよ、アハ、ハ、ハ、ハ、お君さんと駈落をすることを知らねえんだ、金さんは知らずに居るんだ。

(與太はいひ捨て、格子を出ると一散に駈出して行つてしま

(金)

ふ)

お君もまた那麽莫迦に構ふからよ。

誰が此方から那麽ものに構ふやつがあるものかね、黙つて這入つて來やアがつて、馬鹿の癖に……口説いて聽かないつて手込めにしかゝつて眞個に什麼しやうかと思つたのさ、焦つたいつちやない。

(お君は起直つて襦袢を合せて鬢のほつれを搔上げると金藏は何か様子ありげに座を占める。)

(金)

お君！ 手前什麼しても松本へ嫁くなア嫌なのか。

(君)

養父さんも解らないぢやないか、可厭だつていへば可厭だよ考へても御覽、かうして職人の娘でさ、ばらがき育ちに育つ

(金)

た妾だもの、奥様の御新造ので押通されるものぢやアなし、先方でも末始終愛想が盡きることとは極つて居るはね、そりやアお出入の屋敷の事だし、養父さんも樂にならうがさ、行末の事を考へたら、嫁つてつから馬鹿を見て歸つて來るよりか今の中に斷つてしまつた方が仕合さ。養父さんもまた百や二百の貨幣ならば、そんな行末詰らない藝をしなくつても、外に若干も吸上げる道はあるんだから、何も急くにやア及ばないはね。

そ、そらいふものゝな、今日松本の旦那に遇つたら、決して先きへ行つて見棄てるやうなことはしない、仕度金も其方の望通り出さうから、と、ま被仰るんだ。な、さう、ま、い

はれて見るとよ、己も御出入先きの旦那ではあるしよ、手前の出世にもなる事だから、是非差上げませう、仕度金は千圓ともいひてえ處だが、此間から手前の返事が可笑しく澁滞るしするからの、まアま、娘の丁簡も能く聞きまして、意見も申まして、なア、其上きつぱりした御返事を申すすと、請合つて來たんだが、そりやア手前の腕としちやア百や二百の貨幣を捲上げるのは雜作もねい、雜作もねえがな、手前ももうこれ廿一といふ年だ。女は廿歳を越しちやアもう老込みだこゝで千なり二千なりの貨幣を一度に捲上げて、二月か三月か辛棒してりやア、大した資本になるこつた、よツ、うんど云へ、うんど、合點の悪いのは猫でいへば糞仕の悪いのだ。

- (君) そりや、お養父さんのやうに慾一方でかゝりやア何の事はな
いんだがね、妾の身になりやア可厭ぢやないかね。
- (金) そ、それが野暮な根性だ、松本に抱寝をされると思へば腹も
立つがの、二千圓に抱寝をされると思つて見る胸が透かア。
- (君) それがさ、まだ若干出すともいはないんぢやないかね。
- (金) 望み次第といふんだから、此方のいふ通り出すに違ひねえ。
- (君) さううまく出すものかね。
- (金) ぢやアもし千圓出さうといつたら手前松本へ嫁くだらうな。
- (君) 千圓ぢやア可厭だね。
- (金) ぢやア二千圓……………
- (君) 二千圓? ……少と安賣だね……………

(金) 詮方がねえ、二千五百圓と競らう……

(君) ホ、ホ、驚ぢやアあるまいし、ぢやア何しろ千圓下ぢやア破談といふやうな事にしやうぢやないか、いゝかえ。

(金) よからう、千圓以下は破談、至極いゝな、ぢやア一寸松本まで行つて來やう。

(金藏は立上つて貰入を腰に挿す)

(君) ちよいッ、ちよいと待つとくれよ、養父さん、端書を出してつて貰ひたいからさ。

(金) 端書……うむう……何でも出しねえども。

(君) ぢやア一寸待つてゝおくれ。

(お君は懸硯の斗抽から端書を出して何か蚯蚓文字を綴る此間)

二十分)

(金) そんなら……留守を氣を注げなよ。

(と金藏は上框の處まで来て何かまた荐りと探す)

(君) 養父さん……何をしてるのさ?

(金) 己の下駄が見えねえが、先刻の莫迦が拐つてつたに違ひねえ。

(君) お前の懐中から顔を出してるのは下駄ぢやアないかね。

(金) 違えねえ〜。

(と金藏はお君の端書を袂へ突込んでいそ〜と格子を出す)

(君) 端書を忘れずに投函とくれよ。

(お君は後を見送る△此時正午の號砲が烈しく聞える)

(君) ア吃驚した、どれ御膳の仕度でも……………

(どお君鐵瓶へ水を注す)

三

密書ともいふべきところを

釘の折の蚯蚓文字

(金) 無筆の己にやア、何處へ出す端書といふことも解らねえが、

何しろ嬉しまぎれに出し忘れて来ちまつたが……………え、歸りに
しろく。

(ど金藏は獨言をいひながら松本の玄關へ来る)

(金) あ…………た…………の…………ん…………申ますく。

(ど金藏大きく呼入れる書生伊藤蚊飛白の浴衣に洒木綿の兵子
帯といふ體裁でづかしく出て来る)

(伊) いや…………金藏か、上り給へ、さ、まづ上り給へ、

(金) ご…………め…………ん…………下せまし

(ど金藏奥へ通る 辯護士松本匡越後上布の帷子に白縮緬の巻
帯釣瓶形の蓑盆を控えて『露西亞蓑』の烟を吹いて居る人物
は投機心のありさうな嫌味な男)

(匡) や、これはく、暑い中をよく来てくだすつた肌を脱いだら
よからう肌を…………そ…………さう窮屈にして居ては暑くて堪らん
よ…………胡座どやり給へく。

(金) へ…………へ…………へ…………いやも馬鹿にお暑いことで、今年は何
でござすな、この、別して暑さが激しいやうに感じまするので…
…いやもう年を老ちやアから意氣地がござせんで…………から。

(と金藏はおどくいふ)

(匡) 時に早速ぢやが、今朝談したことは什麼ぢやらうかな……さう急にも行くまいが……

(金) えへへへ、其……何でござって……其……尤も……

(匡) 承知をせんかな。

(金) いえ……其……承知は致したんで……

(と金藏は袂から豆絞の手拭を掴み出して汗を拭く途端に以前の端書が落ちる金藏は知らぬ科介)

(金) 漸く、ま、納得を致しましてな、ま、其、此方様へ参れば、

仕合せだと申ましてな、其、ま、餘り冥利が好過ぎやアしねえかなどとな、取越苦勞も致したり……えへへへ、こん

仕合なことはござせんので。
(此時漸く端書へ氣が注ぎ周章て、袂へ押込まうとする松本はこれを制める)

(匡) それは……何かの……お君の書かの、中々よく書くの。

(金) えへへへ、碌に習ひも致しませんので……ほんのな……釘の折でござす。

(匡) いや、これ程書ければ、一寸差支はない。

(松本は端書を把つて口の中で讀下す頗る讀悪い文面)
ちよと申上候今朝おやそく致し候かけおちの事はめらば十じをあひづに致すべく候間其じこくにまらがなくお出で可被下候めらばでなければ松本の莫迦のところへひよとすると行く

かも知れず候間さどくく願上り

きみより

(松本は讀下して一寸氣を變へ金藏の方へ向直る)

(匡) これは何ぢやよ、君が急ぎの用で出す端書ぢやからな、歸りには忘れんやうに出して遣らにやアいかんよ。

(といひながら端書を煙草盆の向へ挿み態と笑つて見せる)

(金) つひな、其、餘り取急いだものですからな。

(匡) で、何ぢやな、愈々お前の方でさうしてくれりやア、ま、仕度料の處ぢやが、二十圓もあれば充分かな

(金) へ……二十圓……も……一遍被仰つて……

(匡) ぢやによつて、愈々お前の方で承知をしてくれるのならばぢ

や、えいかな、二十圓も仕度料があれば充分かといふのぢや

よ!

(金藏は案外だといふ思入)

(金) 二……二十圓と被仰いまするんで……

(匡) それでは不足かな……では三十圓もあればえいかの……

(金藏は到底も談にならぬといふ態)

(金) 難有いことで……へ……充分でござせうとも……

(と捨身でかゝる)

(匡) 然し、今といふても何ぢやから、さやう、明後日の晩方でも来てくれるやうに。

(金) 難有いことで……

(匡) 君にもお前からよいやうにいふて聞かしてくれるやうに。

(金) 難有いことで……

(匡) 處で、直に婚禮といふてもな、仕度も懸ることぢやから、ま、來月中旬かな。

(金) 有難いことで、では歸りまして娘にも喜ばせまして。

(と金藏は會釋して座敷を出る)

(金) へん……千圓の耳が一厘缺けても、己の娘を遣ることぢやアねえ、二十や三十の眼腐金を仕度料も凄まじいや、氣の毒ながら願下げだ。

(と舌をべろりと出して其儘玄關の方へ出て行つてしまふ▲松本は烈しく手を拍つ、書生の伊藤襖の間から首を出す)

(伊) 先生……御用で……。

(匡) 伊藤、ちよッ、一寸這入つてくれ、實に怪しからん……。

(伊) 何ぞ……其……怪しからん事でも……。

(匡) 怪しからん……言語同断だ……不都合極まる。

(と松本は始終憤り切つて居る)

(伊) 只怪しからんでは解らんですな、如何なる理由が怪しからんので。

(匡) 只怪しからん、伊藤！ こ……これを見ろ！

(と以前の端書を蓑盆の間から出して見せる伊藤受取つて讀下す)

(伊) なッ、いかにも怪しからん、これは怪しからん！

(匡) 怪しからんではないか。

(伊) 實に怪しからんです、だが先生の善後策は……断然彼女をお

諦めなさるか？

(匡) それはどうも……諦めることは出来ん。

(伊) なッ御尤もで……、

(と伊藤は考へ込む) ▲松本は漸々にしよげ返る)

(伊) 先生……僕に十圓の運動費をお出しなさい、僕が满腔の熱血を灑いで此事件を擔當しますが……！

(匡) ……十圓……出さう！

(伊) 出しますか先生！ 處でまづ其草案だけを雑と述べませう、まづと、此證據物即ち端書の宛名によるとですな、本所區松

(匡) 代町二十八番地野々村久次郎……これを利用して、異議なく先生のものとするのですが極めて安いことです……。

(伊) 機敏家の君ぢやから……ぬかりはあるまいが、して其草案といふのはな……。

(伊) いふまでもなく彼女を奪ふのです、この葉書面によると明日の晩の十時を合圖とある、そこで僕がこの久次郎といふものゝ積りで、彼女を連出して、上野の公園あたりで先生に引渡しといふ方寸で……名案でせう、此位名案はない筈だ。

(松本はぼんと手を拍つ)

(匡) 妙計と謂つべし、有繋君だ、敬服！

(伊) 處で運動費の處ですが、屹度戴けませうな、それを極めて置

いて戴かんと……。

(匡) 無論！ 前金とはいかんが、必らず出す！

(伊) では野々村久次郎髻でも剃つて置きませう。

(匡) よからうく。

(と松本は無性に悦ぶ▲伊藤は横を向いて舌を出す)

四 茶屋場ともいふべきところを
井戸端の金棒曳

場所は本所松代町裏長屋共同井戸端時は午前九時前後▲野々村久次郎洗剃げた中形の寝衣の上へ細いくけ帯を前結びにし鐵葉の金盥を片手にして齒を磨いて居る▲其側には四十格好の大年増洗濯をして居ると三十格好の中年増これも其側で土

大根を洗つて居る

(大) ねえ、久さん！ お前、此節は仕事に出ないが、何かおし

かえ？

(久) 別に身體の悪いこともねえんだがね、何だかかう異に氣が重

くつて仕事に出る氣がしねえんさ。

(大) それでも結構なことさね、圓に三舛といふお米に遊んでられ

るのは、羨しい御身分さね。

(中年増は土大根の一本を洗ひ上げて、大年増の盥へ水道の手

桶で水を汲込んでやる)

(中) 昨日の御禮！

(大) おやまア難有う……ねえ、おそまさん、久さんのやうな御身

分になつて見たいね。

(中) 眞個にさ、遊んで食られりやア此位結構はありやアしない。

(大) 今度生れたら久さんに生れるこつたね。

(中) 女にやア惚れられるしさ、小遣にやア不自由はなしと。

(久) いゝ加減に冷かすこつた、御兩人の口に懸つちやア何だつて

堪らねえ、糊屋の婆さんもよく饒舌るが、到底も御兩人にや

ア及ばねえよ。

(大) 憚さま、兩人共糊屋の婆さん程、まだ耄碌はしないのさ。

(久) 早く耄碌をした方が、世話が焼けなくつていゝ。

(中) あんな憎らしい口をさく。

(中年増は襷を一揺り揺り上げてひくんだ手を振上げる)

(久) お前に叩かれりやア本望だ。

(と久さんは肩を摺寄せる)

(大) それだから近處の娘ツ子が承知をしないつていふことさ、眞

個に憎らしいつたらない。

(中) 久さんにいくら惚れたつて、お君さんて情婦があつちやア、

姥さん、落膽だね。

(大) おやゝ久さんにやア情婦があるの、ぢやア妾も惚れたけれ

ども廢止にしやう。

(中) あるどころぢやアないのよ、でね、この先の碁會所へ行つ

ちやアね、久さんがね、お君さんての惚氣をいふんだツさ。

(大) 呆れるよ、眞個に、虫も殺さない顔をして居てさ。

(中) それからまアお聞きよ、昨日から仕事に出ないのもね。

(中年増は久次郎の顔を覗き込んで)

(中) 澄ましてるよ、憎らしい、皆素破抜いてやるからい。

(久) 姥さん、おそまさんのいふ事は皆虚言なんだからね、其積りでね。

(大) あゝ、虚言ども、虚言なら聞いてもいいだらう、え、おそまさん、關やアしないよ、あゝやつて澄してるんだもの、後で愚圖くいつたつて妾が反對に苛めてやるはね。

(中) だけご可愛想だから……。

(大) 何しと、關うもんかね。

(中) ぢやア云つちまはうか、久さん、云つちまふよ。

(久) 己ア知らねえこつたから、何んでも仰せられ候へだ。

(中) でね……昨日つから仕事に出ないのもね、お君さんてのから何か打合せの報知があるんださうでね、其便を留守にして居ちやア甚麼間違がないでもないつてね、あゝやつて宅に居るんだつよ。

(大) 心妙なことさね、で、其お君さんてのをお前拜んだの。

(中) あゝ、一度かね、久さんの所へ尋ねて来たのを拜むだがね、色の浅黒いね、眼元の方だね、鼻のつんもりしたね……真個にいゝ女！

(久) 虚言をつけ！

(久) さんは矢庭に水だらけの顔を上げて中年増に食つてか！

る)

(大) あれを御覽よ、あの顔をさ、お君さんてのに見せてやりたいね。

(中) 眞個にさ、三年の戀も一朝だ！

(久) 何だど。

(久) 久さんが立たうとする途端)

(大) 郵便！ 久さん、お前さんのどこだよ。

(久) え、眞個か。

(と久さんは金盃も揚枝も其處へ置いたまゝ周章て、驅出す)

(大) お君さんからだよ、早くお出でよ。

(大年増は盃を小脇にして歸仕度をする)

(大) さ、おそまさん、早く行かうよ、歸つて來ると今度こそは眞個に怒るよ。

(中) あら、擔いだの、姥さん、可愛想に。

(と中年増も大根を抱へて行かうとする ▲塵塚の横手から久次郎『ワツ』と嚇かす兩人は一散に路次へ遁込)

(久) 金棒曳きめ、悪い洒落をやりやアがる。

(水道栓を捻つて久さんは水を盃へあける)

五

『だんまり』ともいふべきところを
意氣地のない 主従の 鞆當筋

(鳥羽玉の闇を便りに二人連) ともいひさうな景色場所は上野公園東照宮華表前 ▲男は松本の食客伊藤頼冠尻端折意氣地

のない形始終久次郎に化けて居る科介▲女は金藏の養女お君
浴衣の兩襟を帯へからげ伊藤に手を曳かれて出る一寸蹴く

(君)

あ痛！ 久さん、妻やア生爪を剝したかもしれないよ。

(伊)

どうせ剝れる生爪なら、早く剝れた方が氣掛りでなくつてい
し。

(と伊藤は合聲でいふ▲お君は久二郎とばかり思つて居る)

(君)

憎らしい、何て口だらう、だがね、久さん、松本といふやつ
もね、平常大きな顔をして居ながら、たつた三十圓の仕度料
とは呆れ返るぢやアないか、それで有繋慾張の養父さんも呆
れちまつて、其場はいしやうなことをいつて引下つて來ちま
つたが、少たア眼が覺めたものと見えて、もう甚麼ことをい

(伊)

つて來たつて彼處へは嫁らないとはいつて居たがね、お前さ
んも知つての通り、他にも随分吸取つた口も多いんだから、
何日何處へ札が落ちやうとも限らないしさ、さうなつた曉に
は第一お前の顔を見ることは出來ず、一生人の翫弄になつて
果てなけりやアならないし……。

實のありさうな男もないかね、だがあの松本に居る伊藤とい
ふ男は瀟洒したい、男ぢやねえかな、あの男ならよからう……。

……。

(君)

あや／＼、什麼してお前さんあの山雀を知つてるの、可厭々
々、あんなやつ、色が生白いはかりで、意氣地がなくつて、
薄鈍で、氣障で、べちや／＼饒舌くつてばかり居やがつて……

……。

(とお君は口を極めて罵る▲伊藤は脇の下の冷汗を拭て居る)

(君) それはさうと、久さん、これから何處へ行くの。

(伊) ……………何處といつて別に…………。

(君) お前さん…………前橋どかに叔母さんがあるといつたぢやないか
え。

(伊) ……………。

(君) 其處へでも行かうぢやないか。

(伊) もう其叔母も久しく音信をしないから、死んだかも知れね
え。

(君) だつてこんな處に徹夜立つちやア居られないぢやないか…………

早く落着先を云つておくれよ。

(伊) ま、何しろ王子まで行かう。

(君) 其處へ行けば落着先があるのかえ。

(伊) いゝえ！

(君) 詮様がないね、それから什麼するの。

(伊) それから…………大宮へ行つて。

(君) それから。

(伊) 宇都宮へ出る。

(君) それから？

(伊) 仙臺！

(君) えゝも焦つたい！

(伊)

(とお君伊藤を突飛す伊藤小石に躓いて轉ぶ額へ瘤が出来る)

痛ッ……失敬極るッ!

(伊藤は瘤へ唾をつけく起直ると思はず地聲を出す△お君氣が注ぐ)

(君)

何だか可笑しいくと思つたら……お前は……久さんぢやないんだね。

(伊)

おう、松本の食客の伊藤だ。

(と前へ出る△お君驚いて竊と華表の陰へ外す△伊藤は知らぬ

科介)

(伊)

何も驚くことはないさ、お君さん、ま、聞いてくれ給へ。

(と此時動物園の虎が大きく吼わる)

(伊)

昨日君の養父さんが屋敷へ来て、お前の端書を遺れたので、先生は大落膽さ、そこで僕が先生を煽動けの、端書を種に久二郎と化け逐せの、お前を此處まで連れ出したのもな、實はといへば僕の魂膽で、先生を出し抜いて、三年越惚れて居る此僕の心を汲んで貰ひたいばかりさ。

(と手を伸して探るお君の居ないのに吃驚して伊藤はけろりとする此以前松本匡洋杖をついて境内を徘徊して居る)

(松)

もう彼此十二時に近いが、伊藤は何をしたものかしらん、元來伊藤も僕も久二郎といふ男を知らんのぢやから餘程仕事がつつかいいて、首尾能くお君を連出したのなら、もう疾うに來る筈ぢやが、未だに影も見せんとになると、或は事を破つた

かもしれん、まア、兎も角も廣小路まで見に出やう。

(と華表の方へ来る伊藤と衝突る互に透し見て)

(匡) 伊藤か、待つて居た〜。

(伊) おう、先生!

(匡) 首尾は?

(伊) 好いやうな悪いやうな……………。

(と伊藤極りの悪き科介▲松本急ぎ込む)

六

大切ともいふべきところを
大『どちり』の千秋樂

(金) さア、此野郎、己の娘を何處へ遣つた、なに、知らねえ、知らねえことがあるものか、貴様の仕業に違ひねえんだ、いは

ねえか、さッ。

(場所は金藏の家の路次▲時は午前七時前後▲金藏は狂氣のやうに莫迦の與太を締め上げて居る見得)

(與) 知らねえよ、知らねえつたら、己の方でお前に聞かうと思つたんだわな、お君さんを什麼したよ、お君さんは己と駈落する約束があるんだぜ、おい叟さん、お君さんは什麼したよ。

(金) あれ、此野郎、そりやア此方はいふことだわ、駈落をする約束がある? 呆助め、手前で白状してるぢやねえか、さ、隠した所を云はねえか、さ、云つちませ!

(と矢鱈に締上げる)

(與) 知らねえといへばよ、己は知らねえんだよ金さん、自分で隠

しどいて、そんなことを云つたつて駄目だ。

(金) まだ、そんなことをいつてやアがる。

(與) お、叟さん、い、呼吸が詰らア、お、おらアま……まつたく知らねえんだよ。

(金) 知らねえことがあるものか、何日かも己の留守に彼様な真似をしたぢやアねえか、うぬッ、什麼してもぬかさねえな。

(金藏は與太の胸倉を二三度こづき廻してドンと反動をつけて突飛ばす) 與太は蹣跚きながら危なく轉びさうにして板目へ擱まる 此時久二郎割つて這入る)

(久) おい、叔父さん、什麼したもんだ、これさ、ま、待ちねえツてこと、危ねえ、年甲斐もねえことをするぢやアねえか。

(金) 久か……手……手前己に加勢して、こ、此馬鹿を締上げて泥を吐かせてくれ、あッ、あ、疲勞れた。

(久) 疲勞もしやうよ、年老でもねえ……だが一體什麼したといふんだな。

(金) 一體も二體もねえ、この馬鹿めお君と駈落の約束なんぞしやアがつて、引拐つて隠したに違ひねえ……。

(久) えッ、此野郎がお君さんと駈落の約束をした、お、叔父さん、己だつて駈落の約束があるんだ。

(金) 何……手前も駈落の約束がある？ 手前に違ひねえぞ馬鹿と二人して引拐つたに違ひねえぞ。

(と金藏はまた久二郎に食つて懸かる) 不意を食つて久二郎術

なき科介（こなし）

(久) お、叔父さん、ま、少と俟つてくんねね、俺しやアね……あ痛……俺しやア……そりやアね、あ痛！ お君さんと約束をしたことはしたに違ひねえがね、ま……まだ駈落までに行かねえんだよ。

(金) 同じやうなことをいふなよ、與太を煽動けて、拐かしやアがつて、うぬ。

(久) ま、俟ちねえ、叔父さん、ぢやアお君さんは居ねえんだね。

(金) ゆ……昨夜何處へか行つちやツたい！

(久) え、昨夜、あの……お君さんが？

(金) さうよ、もういゝ加減に本音を吹け、よツ、叔父の情で、見

逃がしてやるから、よツ。

(久) 莫迦なことを云つちやアいけねえ、約束はしたがね、叔父さん、報知がねえから来て見ると此仕末ぢやアねえか、虚言は云はねえよ、叔父さん、あゝ切ねえ。

(此隙に與太は竊と外して路次口の庇間から窺いて居る) ▲金藏は無性に久二郎をこづき廻す ▲此處へ松本伊藤周章しくやつて来る)

(匡) 金藏！ こらッ、金藏！ 上野から逃げたぞ、上野から……

お君が……上野から……。

(伊) お君さんが上野から逃げてしまつた。大變、大變！

(金) だ……誰と逃げましたな、お君は誰と逃げましたな……誰と

……誰と……。

(匡) 伊藤と上野まで逃げて、それから一人だ！

(金) 伊……伊藤さんと上野まで逃げて、そ……それから一人だ？ ど……何方の方へ一人で……。

(伊) 何處か解らんが……鐵道往生を遂げたかも知れん……。

(金) て……鐵道往生あの鐵道……早く行かなければお君は死んぢまう。……早く……。

と金藏は夢中で馳出す▲松本伊藤周章て、後を追馳る▲此以前に君反對の路次口から這入つて来て同じく庇間から様子をみて居る▲久二郎が周章て、金藏の後を追はうとするのを呼とめる)

(君) 久さん！ 俟つておくれつてば！

(と庇間を出る久二郎振り返り驚く思入)

(久) あう、お君か、お前が鐵道往生を遂げたと聞いて甚麼に吃驚したか知れやアしねえ。

(君) お前の處へ出した端書が、飛んだ處へぐれ込んだものだから、お前に飛んだ氣を揉ませたがね、もうかうなりやア此方のもの、養父さんの歸らない中、駈落と極めるとしやうよ。

(久) だが叔父さんも……鐵道往生を遂げたお前がよ、無事で己ど逃げたと聞いたら、反つて悦ぶかも知れやアしねえぜ。

(君) 什麼でも理窟はつくものさ、だが……嬉しいね！
(とお君久二郎の手を把る)

滑稽小品

落 証

(久) 嬉しくなくつてよ。

(と久二郎お君に手を曳かれて路次を出やうとする▲庇間から
與太突然飛出してお君に抱つく)

(久) 邪魔な野郎め!

(と久二郎見事に與太を投げる)

(君) いゝ體裁だ

(とお君久二郎路次を出る▲與太は恨めしさうに起上つて指を
咬へる)

(幕)

駈 落 終

彌次郎日記

十二月一日 いや北八は何もしたことだ。この頃一向に顔を見せぬが、亦一口物に手を焼いて居る事だらう。此頃とんと俺の領分を東京バックや『ニコく』へとられたので退屈でならねえ、狂歌を考へたがそれも出ねえ。

十二月二日 雨が降つて居る、何故かう雨と云ふものは上から降るものに極つて居るだらう、下から降らせたいね。さうだ、昔は下から降つたものに違ひねえ、あまが下と云ふからな。八笑人に日見の宴と云ふのがあるから、一つ雨見の宴と云ふやつをやつて、一九や北八を驚かしてやらう、さうだく招待状を書く。

拜啓今日此頃の時候冷たいと申してよろしいやら、寒いと申してよろしいやら、とんと相譯らず候へ共御元にはいつもびんく遊ばされ候段大慶の至りに御座候、さて明日弊屋に於て久し振り雨見の宴開きたく候間 萬障御繰合せ御光來被下度候 草々
と云ふのだ。餘り面白くはないが、洒落たことを書いたつて彼奴等に譯るものか。

十二月三日 生憎昨夜からの雨があがつてい、天氣だこれでは兩人共來まいと高を括つて寢て居ると、兩人は雨装束でやつて來た。これはと思つて起きては見たが、もう間に合はぬ。北八め意地の悪い奴ではある、雨見の宴と承はり、早速參上した、定めし此天氣に雨を降らせて見せる積りだらう、さア早く降らせてくれ、濡れて

見たいと云ふのだ。そこで有繋の俺も困つたが、例の十八番の逃げを張つた。

雨見する今日も雲なき大空も

わが云ふことを菊の花傘

とやつてのけると、一九は直に、

雨見とはござア見ろとの宴にや

神もひみよく思召されん

相變らず拙い狂歌だ。それでも料理だけは雨見を利かせてやつた。

菓子に『むらさめ』さ、茶に『玉露』いゝかね、夕立を利かせた冷素

麵は少と寒かつたらう。雷干の漬物に、川施餓鬼で辛茄子などは

妙だらう、北八はこれではと齊に招ばれたやうだと云ふから、雨の

魚の干物とはござんす。

十二月四日 今日にすればよかつた、また雨だ。いかに暢氣でも

これでは愧々するよ。お虎婆から金を借りる。抵當は番傘一本、座

礎した軍艦と云ふ體裁の下駄一足。芝居の書割の箆筒を見せて、あ

れで五十圓ばかり貸せと云つたら、お虎婆さん近眼だから、無闇に

撫つて見てこの箆筒は木が悪いと見えて、いやにべこべこした箆筒

だと云やアがる。大笑さね、それでも下駄と傘で一貫がもの借りて

やつた。

十二月五日 一九が来て、お蔭で膝栗毛が當つたので金が手に入

つた、奢から来いと云ふので、きたり喜多八、直に取巻く。落行く

先きはいづれ吉原さね、久振に太鼓の音を聞いた。餘り躍つて足を

挫いたが大した事はなかつた。

十二月六日 餘り降り通しでも異でないと思つたが、今日は曇りだ。中間の驛といふやつで眞個に可厭な心もちさ。一九は歸らうと云ふのだが、俺の小指が什麼しても放さねえので、どうく流連さ、へん色男には誰がなるツ。すると癪に障るぢやないか、小指が一九に曰くさ、あの人は馬鹿くしくつていゝから、もう少し置いてつておくれと云つたのださうだ。糞ツ、己も男だと歸りに眞面目な顔をして歩行くと大勢子供が集つて来て、やアあの老爺さんを見な、下から禰が下つてらア、と云ふから、見ると完くだ。懐中へ手をつツ込んでこき上げて、あゝ譯らねえやつばかりだ。

十二月七日 一九から膝栗毛の割を貰つたから大威張さ、陋巷に

ある顔子の北八を引張つて、また近所の鳥屋へ飲みに行く、北八め二三日食はずに居たと云ふので、矢鱈にバクつきやアがる。まつたく氣が減けたね、その上贅澤を云つて、やれ刺身がいゝの、やれたいさだのと大した散財をした。そしていひ草がいゝよ、このお禮に明日の朝お前の家の前へ行つて時をつくつてやるツ！ 御挨拶さね。

十二月八日、もう一文なし、また寢の五郎さ、年の暮に餘り錢がなさ過ぎると、氣が沈むよ、其癖いゝ天氣だ。

十二月九日 北八が寢て居ると聞いたから、見舞に行くと、一昨日の鳥が中つたのと、錢のない腹癒せに寢てるのだと云ふ。成程北八の顔が軍鶏に似てるから、手前飛んだことをした、もう人間離れ

がして居ると云ふと、何に似てると云ふから、軍鶏の面に似て來たと云つたら、突然俺を蹴飛ばしやアがつて、さア蹴合ひだどぬかしやアがる、けれども可愛い男さ。

十二月十日 一九から手紙が來て、今日貴様の家へ行くから酒を買つて置け。酒どころぢやアない、來たら水でも飲ませてやれ、なアに酔はうと思へば水だつて酔はねえ事はねえ!

無法者の三時間

繩暖簾を兩手でばらり、薄暗い土間を覗いて、迂散臭さうに見廻した頃の銀次は、其儘衝と奥へ、黒光りのする樽へひんづと腰を下して、兩脇を卓へ落した。

「おう、矮は居ねえかの、銀様のお越しを知らねえかえ!」
 菰冠りの影からぬつと顔を出したのは所謂矮!

「被入い、お氣の毒ですが、今日は何にも無いんですよ」
 と、其儘立ちも上らぬなり。

「誰が肴の事を聞いた、薄鈍め、焼酎を持つて來い」
 「だつて!」

と云ひ淀んで、矮はさも恨らめしさう。

「だつて……銀さん、随分勘定が溜つてるぜ」

銀次は衝と脇を引いた。肩越しに睨み据えて、

「なに? 勘定だ、有りさへすればくれてやらア、無えから溜めたんだ、よ、強情を張るものぢやねえ、いゝから一杯酌ぎねえよ」

「だつて親爺がそう云つたんだ、銀さんが来たつて決して酒をやつちやアならねえツて」

「ふん！」

と鼻で笑つたが、

「親爺が何と云はうとも、一旦暖簾を潜つたら、素手で歸る俺ちやねえ……事を知つてるだらう」

「そりや知つてるさ」

「知つてる位なら早く出せ、出さねえと野郎、こッ酷い目に逢はせるぞ！」

彼は急に身を起こして卓を離れた。逃げんとあせる矮の左手をむづと把つたが、

「さア出さねえか！」

「だつても……銀さん！」

矮は憫みを乞ふやうに、銀次の胸へ瞳を据えたが、

「だつて……だつて、親爺が歸つて來ると怒るもの！」

「野郎！」

と一つ平手で擲つて、

「云ふ事を聞かねえと、命が無えぞ」

取縛つた二の腕に力を凝めてこづき始めた途端、

「まア、待ちねえ、什麼したと云ふんだ！」

後ろに聲あり、主は棒手振の三太と云ふ若いのが、とほんと立つて見て居るばかり、